慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換 : 一九七九年三峡ダムサイトの決定をめぐって
Sub Title	Paradigm shift of dam security in the history of the Three Gorges Dam : through the decision on the Three Gorges Dam site in 1979
Author	林, 秀光(Lin, Xiuguang)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.94, No.5 (2021. 5) ,p.27- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20210528-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換

――一九七九年三峡ダムサイトの決定をめぐって――

林　秀光

はじめに
第一節　最高指導層の動き
1　高まる水力発電への期待と三峡ダム
2　政策を主導した李先念と王任重
①「経済工作の『秦始皇帝』」李先念
②　北京の権力中枢に返り咲きした王任重
3　葛洲壩ダム工事の品質問題をめぐる陳雲と李先念の攻防
4　全人代常務委員会李井泉と葉剣英の視察
第二節　主管部門内部の動き
1　長弁の動き
①　三峡ダムの安全保障への懸念と候補地太平渓へのこだわり
②　四川省党委書記趙紫陽への働きかけ
2　水利部門と水力発電部門の軋轢
①　政治運動に由来する複雑な人間関係
②　河川開発の主導権をめぐる攻防
第三節　李先念と王任重主宰の四月二六日国務院会議
1　王任重の役割
2　会議での意見対立
①　三峡ダムの安全保障問題をめぐる王震と趙紫陽の意見相違
②　趙紫陽の延期提案と銭正英の洪水対策の強調
第四節　五月の三峡ダムサイト選定会議
1　王任重による「八一年着工」の説得
2　異議の表出と新華社記者による内部報告
3　李先念の反応
4　陳雲の指示による李鋭の意見書
第五節　米国の資金援助をめぐる水利部門と水力発電部門の軋轢
第六節　水利部党組による三峡ダムサイトの決定と背景

1　九月の「三峡ダムサイト選定会議報告会」における安全保障の議論
2　水利部党組による候補地三闘坪の決定
3　葛洲壩ダムとの関係
おわりに

はじめに

三峡ダムは一九七四年に葛洲壩ダムの再建との関連で約一五年ぶりに政策過程に再浮上した。(1) それを受けて、三峡ダムを推進する主管部門である水利部門にとって最も重要な課題は、最高指導層に対し六〇年から迷走しつづけてきたダムサイトの選定に決着をつけることを通して、三峡ダムの決定を促すことであった。

長江流域規画弁公室（以下、長弁）は七六年五月に三峡ダム候補地である三闘坪と太平渓のうち、ダムの安全保障を重視する視点から太平渓を国務院に推薦した。(2) 七九年四月二六日に李先念と王任重の主導により国務院会議でダムサイト選定会議の開催が許可されたが、翌月のダムサイト選定会議においても、長弁は太平渓を推薦した。

この会議では三闘坪と太平渓をめぐって議論が紛糾し、三峡ダムそれ自体の必要性までも疑問視された。にもかかわらず、政策が依然として進められ、長弁は九月の「廊坊会議」においても太平渓を提案しつづけた。しかし、水利部党組は一一月に三峡ダムサイトを三闘坪に決定した。

五九年から六〇年に三峡ダムは、毛沢東と軍によるダムの安全保障問題への懸念によって頓挫し、長弁が三闘坪を放棄しミサイル攻撃に強いとされる太平渓を候補地として提案したことについては、拙稿で詳述した通りである。(3) したがって、太平渓の放棄は、政策決定者の安全保障への懸念が希薄化したことを意味するものであった。政策決定を左右した「ダムの安全保障」が「決定的」な要素ではなくなったという、三峡ダムの歴史におけるパ

ラダイムが転換されたといえよう。(4)

推進派の長弁主任林一山がいみじくも指摘したように、三峡ダムサイトの決定は、「何年も棚上げされた三峡ダムの問題がこれを機に新たに態勢を立て直し、国家の議事日程に組み入れることができた。それによって、まもなく完成する葛洲壩ダムの労働力と機器を三闘坪に移動することができた」(5)。つまり、停滞していた三峡ダム計画がダムサイトの決定を通して大きく推進され、また主管部門が抱えていた葛洲壩ダムの問題を解決する道筋もできたということである。

そして、三峡ダムサイトの決定は、迷走していた三峡ダム計画それ自体がようやく最高指導層において「正式に」認められたことを意味するものであった。その後の動きは、ダムの規模を規定する正常貯水位の決定へと焦点が移っていった。この点においても、三峡ダムサイトの決定はひとつのパラダイム転換であったといえよう。

このように、三峡ダムサイトの決定は三峡ダムの歴史においてきわめて重要な転換点であったが、その重要性に注目し、またその決定と三峡ダムの安全保障の関係を論じた研究はない(6)。先行研究が、三峡ダムサイトが太平渓から三闘坪に決定されたことにより、ダムの安全保障に関するパラダイム転換を究明できなかった要因について、以下三点が考えられよう。

第一に、政策決定の「決定的」な要素であったダムの安全保障により計画自体が約一五年にわたって頓挫したことは拙稿で指摘した通りである。しかし、先行研究はこうした歴史的な経緯についての認識が欠如したために、その転換を捉えることができなかった。第二に、資料の不足または利用する資料のかたよりに起因するものである。というのも、そもそもこの問題は機密性の高いものであるゆえ、公開された情報が少ないことに加え、主管部門もダムの安全保障を問題視しない傾向が影響している。たとえば、三峡ダムに異議を持つ李鋭の著書でさえもほとんど言及が見られない。第三に、敏感な問題であるため、あえて触れないという可能性も考えられる。

本稿は、主管部門の業界誌をはじめ議事録、政策決定圏内で交わされた多くの書簡を中心に、米中国交正常化および中国政治の権力交替期において三峡ダムサイトが三闘坪に決定されたことによって、三峡ダムをめぐるダム安全保障のパラダイム転換がおこった背景について、以下三つの視点から考察する。

第一に、中国政治が階級闘争から経済建設への移行を主導した華国鋒ら最高指導層による水力発電の重視と三峡ダムの関係。第二に、米国から水力発電への二〇億ドルの借款の役割とその配分をめぐる最高指導層を巻き込んだ主管部門内部の軋轢。第三に、三峡ダムの安全保障をめぐる最高指導層の考え方である。

第一節　最高指導層の動き

1　高まる水力発電への期待と三峡ダム

三峡ダムの膨大な発電量は五〇年代には当時の経済規模を超えるものであったため、政策決定の足かせとなっていた。しかし七〇年後半からは電力不足の問題が顕在化し、エネルギー源の四割にとどまっていた水力発電への期待が高まった[7]。最高指導層および主管部門である水利電力部（以下、水電部）にとって、水力開発の必要性は共通の認識であった[8]。

とりわけ、文化大革命（以下、文革）終了直後に経済の再建を指揮した最高指導者である華国鋒は、七七年末に「電力問題は三年内に飛躍的な成果をあげられたとしても、やはりまだ立ち遅れている」と強い危機意識を抱いていた[9]。彼は「必ず水力資源を十全に利用し、電力開発を発展させなければならない」と水力発電の重要性を示唆した[10]。

七八年四月に開かれた全国基本建設工作会議において、李先念も三峡ダムを「三峡発電所」（原語：三峡電站）

と称しその発電の役割に力点が置かれた表現を用いて、発電の規模と投資が見合っていることを強調し、強く推進した[11]。彼は、「三峡発電所」について「今年中に計画案を提出するようにすること。三峡ダムからは二五〇〇万キロワットの電力が得られるというのに、建設費はたったの一五〇億元である。なのになぜ決心がつかないのか？」と三峡ダムの役割と合理性を強く主張した。

また、彼は「在席の各位は皆、若くない。あと一〇年経てば体力も気力もなくなり、なにもできなくなる」と余秋里、王震、谷牧、康世恩、銭正英ら一座に発破をかけてきわめて前向きな姿勢を示した[12]。

七九年一月の『人民日報』では、「四つの現代化」に合わせて大型の水力発電所を建設する必要があり、「将来、三峡や金沙江において大型発電所を建設できれば、『西電東送』が実現でき、根本的に華中、西南、ないし華南、華東の電力の現状を変えることになる」と主張され、その青写真には三峡ダムが含まれていた[13]。このように、三峡ダムという大型水力発電所の建設は国家プロジェクトとして取り組まれようとしていた。

後述する同年四月二六日に開かれた三峡ダムを討議する国務院会議においても、李先念は「じつをいうと、現在私は電力のことで頭がいっぱいだ」と告白し、「三峡ダムができれば、二五〇〇万キロワットの電力が得られる。それによって中国のエネルギーと経済の状況は大きく変化するだろう」と三峡ダムの発電能力を強調し、強い期待を寄せた[14]。

七五年末の統計では、全国の水力発電の総発電容量が約一五〇〇万キロワットであったことを考えると、三峡ダムは単独でそれを優に超える発電量を賄うことができ、電力不足に悩まされる政策決定者には魅力的であったことが容易に想像できよう[15]。この時期から、三峡ダムは大型水力発電所としての役割が大いに期待され、提唱時の洪水対策としての治水機能よりも強調され、三峡ダムの推進力となった。

2　政策を主導した李先念と王任重

①「経済工作の『秦始皇帝』」李先念

七八年一月六日から九日まで李先念が谷牧とともに葛洲壩ダムを視察した。じつはその際、現地での会議中に李先念が突如、「政策決定権が分散しすぎている」との鄧小平の指摘に言及した。それに対し谷牧がすかさず、李先念こそが「経済工作の『秦始皇帝』である」と李の権威を一座に示すかのように称えるという一幕があった(16)。このやりとりは、党内における李先念の立場、とりわけ鄧小平との微妙な関係を匂わせていたといえよう。

鄧小平は、七三年に下放先から北京に復帰した際、李先念の取り仕切る国務院業務組の構成員にすぎなかった。しかし、二年後の一月に毛沢東の意向により病中の周恩来総理の「代行」として第一副総理に任命されている。

この人事をめぐって、周恩来はその直後の二月一日に国務院副総理の分業問題と関連して、「特別に言っておくべきことがある。『九・一三』（七一年のこの日に起こった「林彪事件」を指す――筆者注）以降、ないしもっと早い時期から、主として（李）先念同志が国務院を統括している」とわざわざ念を押すような発言を行った(17)。これは、周恩来の李先念に対する高い評価であると同時に、自分の後任に据えられなかったことへの悔しさもうかがえる興味深い発言といえよう。

鄧小平は七六年四月に再び失脚したが、三度目の復活を遂げ、翌年八月に国務院常務副総理の座についた。谷牧が李先念を「経済工作の『秦始皇帝』」と発言したのはその直後であったが、まさに二人の微妙な関係をおもんぱかってのことであったといえよう。

李先念と鄧小平は五歳しか違わないが、年長の鄧小平は党内におけるキャリアや影響力が李先念より強かったといえる。しかし李先念は、文革中に周恩来の右腕として国務院業務組を統率し経済建設を指揮する立場にあり一貫して権力の座にあった。また、毛沢東死後の「四人組」の打倒に際し、華国鋒を積極的に支援し中心的な役

割を果たしたことから、華国鋒が党と国家の最高指導者として地位を固めるのに応じてその影響力も強くなったと思われる。

李先念が鄧小平の発言に言及した直後の三月一〇日に、華国鋒によって指示された国務院副総理の分業において、鄧小平は「華国鋒に協力して国務院の全面工作に領導し、外交、科学、教育を主管する」ことになっていたが、李先念は「国務院の日常工作を主管し、外交と経済を主管する」となっていた(18)。

このように李先念は鄧小平と拮抗できる立場におり、また経済を主管していた。李先念は七九年末ごろまで、「経済工作の『秦始皇帝』」の名に相応しく、副総理に返り咲きする湖北省時代の部下王任重、水利部門の銭正英、林一山らとともに三峡ダムの政策形成を主導した。

② 北京の権力中枢に返り咲きした王任重

王任重は五〇年代から三峡ダムと関わり、自他ともに認める三峡ダム推進派であり重要なキーパーソンである。彼が初めて毛沢東に会ったのは五三年二月一六日、武漢でのことであった。これは同時期に毛沢東との初めての面会を果たした林一山より三日早い。当時、王任重は三六歳の若さであったが、すでに二〇年もの共産党籍を持ち、湖北省党委員会常務委員、湖北省人民政府副主席と武漢市党委員会第一書記として、党と政府両方の重要ポストを兼任する新進気鋭の地方幹部であった。王任重は翌年六月に湖北省委第一書記に昇任し一二年間にわたって在任した。

毛沢東は五三年二月を皮切りに、逝去の二年前まで頻繁に武漢に滞在したが、とりわけ、王任重の失脚前までは長期の滞在が目立ち、二人の親しい関係を物語っている。

また、遊泳をこよなく愛した毛沢東はとりわけ長江で泳ぐことを好んだ。五六年五月三一日から六六年七月一

六日までに毛沢東は通算一八回も長江での水泳を楽しんだが、王任重はほとんど毎回毛沢東に同伴した[19]。毛沢東自身も外賓に「王任重は遊泳仲間だ」と公言するほどであった[20]。

五八年九月、毛沢東の外遊時に同行した元国民党将校であった張治中は、武漢のあるレストランで、王任重が毛沢東の前で足を隣の椅子にかけて座り、寛ぐ様を目撃し、共産党幹部間の親密な関係にいたく感心した[21]。それは王任重が毛沢東の前でそれほどリラックスできる地方幹部であることを示すエピソードであった。王任重は毛沢東より二四歳も若かったにもかかわらず、このように厚く信頼されていたのである。

六六年五月に、彼は毛沢東が文革の発動のために設置した「文化大革命小組」の副組長に抜擢され北京に異動した。しかし、その年末に失脚し北京を追われた。

七八年一二月に王任重は北京への復帰後、三峡ダムが九二年全人代で決定される直前の三月一六日に逝去するまで、積極的に三峡ダムを推進した。そもそも王任重が副総理のほかに兼任したのは、国家農業委員会主任と国務院財経委員会委員であり、農業を主管する立場であった[22]。水利部は七九年二月に水電部から分割されたのちに国家農業委員会の下部組織になったため、組織的にも王任重の指導下に置かれた。

王任重は湖北省在任中の五四年夏に長江の大洪水を経験しており、武漢市を洪水から保護するにあたり三峡ダムが持つ重要性と必要性を一貫して強調してきた。彼は、毛沢東との親密な関係を利用して、六七年に失脚するまで幾度となく毛沢東と林一山の間の橋渡しを行ったが、復帰後も長弁と最高指導部の間で書簡の受け渡しをするなど同様の役割を果たした。

こうした三峡ダムとの深いつながりとともに、王任重は復帰早々に三峡ダムに積極的に関わった背景には、彼の個人的な思惑もあったろう。というのも、前述の通り彼の北京の権力中枢におけるキャリアはごくわずかであった。加えて、「文化大革命小組」の副組長として「文革」の発動に関わった彼が、「文革」で迫害された多く

の幹部がいる北京の権力中枢で温かく歓迎されたとは考えにくい。したがって、彼は三峡ダムというプロジェクトを成功させることによって権力中枢での権力基盤の構築を図ったとも考えられよう。

3　葛洲壩ダム工事の品質問題をめぐる陳雲と李先念の攻防

葛洲壩ダムの再建は七四年に始まった。その建設過程において具体的にどのような工事の品質（原語：質量）の問題があったかは不明であるが、七八年七月八日に、李先念が長弁技術者曽光の内部告発書に「批示」をしている。この「批示」は葛洲壩ダムに直接関わる「谷牧、銭正英、杜星垣、韓光ならびに陳丕顕」に回したものであった。その内容は、「曽光同志の手紙について、極力重視するように同志たちに期待する。いかなる状況でも、ただちに調査し報告を出すこと。工事の品質第一をかならず強調しなければならない。なぜならこれは千年にわたることであり、絶対にぞんざいにしてはならない。品質に問題が生じれば、それはすなわち犯罪だ」と非常に厳しい口調で部下に調査を指示した。

谷牧も「ただちに人員を派遣して調査を行う」と「批示」したが、問題の解決には至らなかったものと思われる。というのも、同月二七日に、李先念は再度「関於長江葛洲壩工程進展情況和施工中的問題」と題する新華社の記者による内部報告書である「国内動態清様一二一九号」に長編の「批示」を出した。そのなかで、李先念は厳しい調査を要求したことに加え、「人の口をふさぐことはできない」として、当事者は謙虚に反対意見を受け入れるように諭している。

最後に、おそらく部下の密告者への対応を問題視したと思われるが、しっかり問題の解決ができなければかならずやまた「密告」され、「その時には窮状を逃れることができなくなる人も出てくるだろう。厳しい批判ないし党の規律と国家の法律によって罰せられることも考えられる」と警告した。そして、「厳しいことを言ったか

もしれないが、もはや聞いていないという弁解は許されない。調査後の状況を報告するように」と念を押した。じつは、その「批示」の前日に、陳雲が李先念に対して婉曲な言い回しながら、この問題の解決を促している。つまり、「葛洲壩ダムの品質問題は注意する必要がある。これはほんの少しの瑕疵も許されない。ご多用のあまり見落としがあってもいけないので、念を押した」。

李先念は同月二九日に銭正英宛てに陳雲のこの指示を伝達するように伝えた[23]。

同年一〇月二〇日に、李先念が葛洲壩ダムの「同志たちへの手紙」という形で事後の指示を行いこの問題はようやく解決した。そのなかで、ダムの品質問題について再度強調し、一貫して工事の品質を保つように要求した。同時に、「貢献の大きい同志には相応の物的奨励を行うように」と指示した。翌日、銭正英はそれを全従業員に伝えるように葛洲壩工程局党委に指示している[24]。

以上のことから、李先念が主として管轄してきた葛洲壩ダムの工事の品質問題に、陳雲も並々ならぬ関心を寄せていたことが明らかである。また李先念の部下に対する厳しい口調や協力した者への褒美を指示したことからも、二人の念頭には、まだ記憶に新しいであろう七五年八月に淮河流域で発生した、大型ダムである板橋ダムと石漫灘ダムをはじめとする中型、小型ダムの相次ぐ決壊という大惨事があったと思われる[25]。そして、陳雲の抱く不信感や懸念のようなものが、後述するように、彼が李鋭に中央への三峡ダムの異議申し立てをさせる動機となったのであろう。

4　全人代常務委員会李井泉と葉剣英の視察

七四年から長弁は三峡ダムの早期着工を国務院に求めていた。後述するように、水利部党組による三峡ダムサイトの決定は七九年一一月であるが、それに先立ち全人代常務委員会の李井泉と葉剣英は再建中の葛洲壩ダムを

視察している。

全人代常務委員会副委員長李井泉が葛洲壩ダムを視察したのは七七年一〇月二七日で、彼は葛洲壩ダムを視察する前に重慶から下る船の上で、「毛主席の遺志を継承し、三峡水力発電所の建設に奮闘する」との題辞をものしている[26]。別稿で詳述したように、五七年一二月三日に周恩来は「中国五億四千万キロワットの水力資源の充分な利用と長江三峡ダムの建設という遠大な目標の実現に奮闘する」との題辞を認めており、入手が叶った資料では、この時まで「三峡ダム建設に奮闘する」旨を明記した人物は李井泉で二人目である[27]。同時に、二人とも三峡ダムの発電の役割を強調したことが注目に値いする。

また、二年後の四月一九日に、葛洲壩ダムを視察した中共中央副主席兼全人代常務委員会副委員長葉剣英は、現場で「偉大なる党、偉大なる人民、偉大なるプロジェクト、偉大なる勝利」と感極まって連呼した[28]。前述したように、七八年七月に葛洲壩ダム工事の品質問題に関する告発を受け、陳雲と李先念は神経を尖らせていた。事態が収束したのは、まさに葉剣英が葛洲壩ダムを視察する直前であった。また、この視察と賞賛は、最高指導層における三峡ダムにまつわる動きをうかがわせるものであった。

というのも、七九年三月、（元）水電部が組織したブラジルへの水力発電考察団が三峡ダムの設計と施工の参考にすべく、施工中のイタイプダムプロジェクトおよびその他の大型水力発電所を視察した[29]。これは三峡ダム建設を目的に派遣された初めての海外視察団であったと思われる[30]。

葉剣英が葛洲壩ダムを視察したのは、このように三峡ダム建設を目的とした、初の海外視察団が派遣された翌月である。このことから、特定のプロジェクトを念頭に置いた海外派遣について最高指導層では何らかの議論があり、自分の目で建設中の葛洲壩ダムを確かめたかったものと推測されよう。

三峡ダムは最終的に九二年四月の全人代で決定されたが、この時点では三峡ダムを全人代で決定することは想

定されていなかった。三峡ダムの政策決定過程における全人代の関わりは、この二人の常務委員会副委員長の現地視察から始まったといっても過言ではない。

第二節　主管部門内部の動き

1　長弁の動き

①　三峡ダムの安全保障への懸念と候補地太平渓へのこだわり

七四年一〇月に、葛洲壩ダムの工事は停止から二二か月ぶりに再開した。それを受けて、林一山が率いる葛洲壩工程技術委員会は、その直後の一二月から七八年四月までに開かれた第六回から第一〇回の会議報告において以下三点を国務院に対して要求し、三峡ダム政策を推し進めた(31)。

第一、葛洲壩ダムの堰き止め工事を行う前に必要な、三峡ダムを堰き止める際の水中工事の着工。その理由として、三峡ダムは葛洲壩ダムとは計画上一体化したものであり、葛洲壩ダムは三峡ダムの「実戦準備」であることが挙げられている。

第二、葛洲壩ダムの施工進度に合わせ、三峡ダムの「初歩設計」の補充報告を作成するにあたって懸案となるダムサイトの決定。

第三、中央レベルでの「三峡工作会議」の開催。

第一点目の要求について、この工事の着工が認められることで必然的に、あるいは暗黙の了解として三峡ダムの建設は許可されたものとのコンセンサスを発生させる効果を狙っていたものと推測される。結果的に、こうした長弁のある種の「企て」は見破られ、葛洲壩ダムの完成後も着工は認められなかった。

第二点目のダムサイトについて、別稿で詳述したように、長弁は五九年に完成した「三峡水利枢紐初歩設計要点報告」において三闘坪を提案していたが、三峡ダムの安全保障問題を考慮し放棄した。そのかわりに太平渓を提案した[32]。七四年には、長弁によって「太平渓壩址分期開発方案設計報告」が作成され、太平渓をダムサイトに、正常貯水位を初期一五〇メートル、完成時二〇〇メートルの二期に分けて建設することが提案されている。

翌年八月下旬、谷牧の率いる国家建設委員会は、葛洲壩工程技術委員会第七回会議の提案に基づき、「三峡水利枢紐工作会議」を開催した。この会議では、ダムサイトと正常貯水位の問題が討議され、五八年以降の三峡ダムの立ち退き地域の社会と経済状況について再調査するように指示された。

つづいて、七六年三月に、長弁は「三峡水利枢紐初歩設計要点補充研究報告」（以下、「ダムサイト補充研究」）を完成させ、五月二八日に水電部、国家計画委員会、国家建設委員会および関連部署に提出した。この「ダムサイト補充研究」において、長弁は太平渓を「三峡ダムの安全保障問題が提起されてから十数年ぶりの新しい成果」であるとして、三峡ダムサイト候補地に推薦した。

その理由は次の通りである。つまり、「三闘坪と太平渓はともに三峡ダムを建設する良好な地質条件を備えており、水工と施工の要件も満たしている。もし核兵器攻撃からの防衛を考慮せず、普通のコンクリート建造およびダムサイトの背後に発電所を据える配置で建設するのであれば、三闘坪が優れたダムサイトである。一方、核兵器攻撃を考慮して断面を大きくするコンクリート建造および発電所を主に地下に据える配置であれば、太平渓が比較的有利である」[33]。

七七年九月、長弁は「三峡水利枢紐防護方案研究報告」を水電部に報告した[34]。こうした動きに合わせて、林一山の率いる葛洲壩工程技術委員会は、国家建設委員会に「三峡工作会議」の開催を要請し政策決定を促した[35]。じつは、前述した七八年一月の視察中に李先念は、「わたしが三峡ダムをやると言ったら、その堰き止め工事

を葛洲壩ダムの堰き止め前にやることになるようだ。この問題は、今日は話さないでおこう」と発言した[36]。彼はつづけて、「まずは、最初に四川人を説得しなければならない。彼らには一〇〇万人を超える立ち退きを強いることになるから」と話題をそらした[37]。

このように李先念は、長弁の「三峡ダムの水中工事」の許可要請をやんわりと断り、四川省の説得が先決であると論点をすり替えた。一方で彼は、「年内にダムサイトを決定すること」と「高壩中用」案の検討を指示した[38]。

それを受けて、早速翌月四日から二四日まで、水電部と地質部のそれぞれの工作組、長弁と葛洲壩工程局によるダムサイト選定会議の開催を準備する会議が開かれた[39]。七〇人が参加したこの会議では、ダムサイトに関して、意見の一致が得られなかったもののきわめて率直な議論が交わされた。

本会議では、決壊した場合の下流への影響の大きさからダム安全保障の基準は、中央に決定を委ねるべきだという意見が出された。これを受けて、目下安全保障に有利なダムサイトを選定したほうが能動的に動けるという理由で太平渓を推す声がある一方、施工スペースや発電所の配置場所が確保できること、中堡島という中洲もあり堰き止めに有利であることから三闘坪を評価する意見も見られた。

同時に、太平渓は地下の工事が多く技術的に複雑で、想定外の問題が起こる可能性が大きい点が懸念された。それに対して、三闘坪は地上での工事が多いため問題が予測しやすく、葛洲壩ダムの建設に参加した技術者と労働者が間を空けずに三峡ダムの現場に派遣された場合、太平渓よりも葛洲壩の経験を活かしやすい、とも指摘された。

八月に長弁は、「長江三峡水利枢紐選択補充設計階段報告」を完成させ水電部に提出したが、その際にも、太平渓を推薦している[40]。一一月には、長弁は再度中央に対してダムサイト選定会議の開催を求めた[41]。

② 四川省党委書記趙紫陽への働きかけ

前述したように、李先念が四川省を説得する必要があることに言及したが、それを受けて同年六月二三日に、林一山と魏廷琤らが四川省で立ち退きの重点的な地域を調査し、四川省党委員会第一書記である趙紫陽を訪問した。

趙紫陽は、「四川省は三峡ダムをやりたくないのではなく、少し遅らせてほしいと思っている。四川人民は『四人組』のせいでつらい思いをさせられたから、いまは一息つきたい」と四川省の置かれた状況を述べ、三峡ダムの建設に猶予を求めた[42]。また、趙紫陽が（長江上流）金沙江でのダム開発を提案したのに対して、魏廷琤は、「廉価な電力が得られるが、（長江中下流の洪水対策の役割を果たす）三峡ダムの代替にはならない」と長弁の立場から反論した[43]。

趙紫陽は、林一山の立ち退きに関する解決策について、「その土地の事情を加味し、水没地点より海抜の高い土地に移住させ、農業以外の生計手段も設けるという提案はよいが、ただ四川は山が多く、食糧問題を解決することが難しい」と述べ、推進派の立ち退き政策に全面的には同意していなかったことがわかる。

趙紫陽は、「そのため、試験的に立ち退きを行う案に賛成だ。三峡ダムが『分期建設』の手法を取り、第一段階の立ち退きが二〇万人程度というなら問題は大きくない。その立ち退きを四川省内のほかのダムで試験的に実施してほしい」と述べ、四川省内にダムを誘致しようとした[44]。

この調査を受け同年一〇月二六日、林一山は李先念と国務院宛てに提出した「関於三峡水庫移民問題的報告」のなかで、「趙紫陽同志が同意を示し、立ち退きをまず四川省内で試験的に行うと指示した」と報告した[45]。

この際、林一山は趙紫陽が三峡ダム建設を遅らせたい意向であることについては言及しなかった。また、その立ち退きに関する提案は四川省内のほかのダムに関するものであることも曖昧にし、あたかも趙紫陽が四川省内

で生じる三峡ダムの立ち退きを試験的に行うよう提案したかのように報告した。

そのうえ、林一山は李先念の指示した「高壩中用」案に基づき、初期一五一メートルの貯水位に合わせた立ち退きの準備への着手に許可を求めた。ここには、中央に立ち退き準備の着手を許可させることで、三峡ダム建設を既成事実化しようという彼の意図が感じられる。

じつは、同年一二月二七日に銭正英が魏廷琤に対して、「趙紫陽が中央工作会議期間中に三峡ダムの立ち退き関連の補償経費が確保できないとの危惧から、水力発電所は発電開始一年目の収益を中央に上納せず、立ち退きの経費にするという政策を定めるべきであると提案した」と伝えている(46)。

また後述するように、趙紫陽は翌年四月二六日の国務院会議においても三峡ダムに対して慎重な態度を見せており、彼は一貫して、四川人民の立ち退き負担の軽減と補償の確保を求めていたことがわかる。

林一山は晩年、趙紫陽が三峡ダムそのものには反対しなかったが、ただちに着工することには賛成しなかったと認めている(47)。また、「彼（趙紫陽を指す――筆者注）は四川省の立場から、四川省東部の水没と立ち退き住民の問題について当然考慮しなければならなかった」と趙紫陽の立場にも理解を示していた(48)。とはいえ、当時林一山が、趙紫陽の支持を得たとして性急に三峡ダムの立ち退きの準備を進めようと中央に要請したことも事実である。

2　水利部門と水力発電部門の軋轢

①　政治運動に由来する複雑な人間関係

七九年二月に水電部は水利部と電力工業部に分割され、水力発電部門は電力工業部の一部になった。それを機に、三峡ダムをめぐる水利部門と水力発電部門の対立は、河川開発における大型ダムの立案と建設の主管をめぐって再燃した。こうした組織的な攻防の背景には、分割後の部門利益がより可視化されたことに加え、李鋭の

失脚を例とする、従来の政治運動と関連した両部門間の複雑な人間関係がある。

五八年二月、南寧会議の直後に水利部門と水力発電部門の利害関係を調整すべく、水利部と電力工業部が合併され水電部になった。当時李鋭は南寧会議でその才能が認められ、水電部副部長に昇格し、また毛沢東の希望によりその秘書も兼任することになり意気揚々としていた。しかし不運なことに、翌年彼は毛沢東の秘書という身分があったため参加できた廬山会議で大躍進運動を批判したとして失脚し、北京から追われ二〇年間にもわたって辛酸をなめた。

じつは、李鋭は建国後に故郷湖南省に戻っており、共産党の組織系統である湖南省宣伝部長の座にあったが、国家建設に貢献すべく実務の世界に投身したいとの思いで五二年に陳雲のつてにより中央政府部門に転任した。廬山会議で失脚した際、彼はまだ四〇歳の若さであったが、志とは裏腹に、六〇歳までの壮年期に重なるキャリアの半分を牢獄と安徽省の辺鄙な山間にある磨子潭ダムで「文化員」として過ごすことになった[49]。

李鋭は七九年一月六日に北京に到着し水電部副部長に復帰を果たしたが、その前日に水電部では彼を名誉回復する大会が開かれた[50]。彼の復帰との関係は不明であるが、その翌月に、水電部は合弁して約二〇年後に水利部と電力工業部に分割されている。八二年三月に水利部と電力工業部が再合併された時には、李鋭は中央組織部副部長に移籍し、再度共産党の組織系統に戻った。したがって、李鋭の水力発電部門での経歴は通算約一〇年に満たず、三峡ダムをめぐって意見を異にする銭正英、林一山、李伯寧、魏廷琤などが一貫して水利部門に在任したことを考えると、彼の水電部における立場がいかに微妙であったかがうかがえる。

また五九年当時、「李鋭をはじめ長年にわたり水力発電に従事した六名の同志を集中的に批判し、党組織の名義で『李鋭を首謀者とする右傾社会主義反党集団』と決定した。それによって全国水力発電系統の多くの同志が連座され批判された[51]」。その際に、水電部門系統の研究機関も解体や改組の憂き目にあっている[52]。このように、

李鋭のみならず水利部門と水電部門間の歴史的な因縁関係が存在していることが明らかである。

それがある意味で解消されたのは八八年まで待たなければならなかった。この年の一月に水電部党組は、「関於対『李鋭反党集団』平反的決定」において次のように関係者に謝罪した。つまり、「水電部党組は、水利建設、火力電力建設と三峡ダム計画に関する方針に異なる意見をもつ水力発電部門の人間を反党、反中央、反社会主義建設として、『李鋭を首謀者とする右傾社会主義反党集団』の構成員と定めて批判した」と認めた[53]。

一方、水利部門を率いる銭正英は周恩来の庇護のもと、部門の分割と統合のなかでも一貫して権力の座にいた。彼女は七五年には水電部副部長から部長に昇進し、その後の分割も物ともせず八八年まで部長の地位と同時に党組書記を務め、権力を一手に握っていた[54]。

また、その下部組織である長弁は、周恩来の力添えにより大躍進運動後の経済困難期にも資金が与えられ、政府部門の統廃合の動きのなかでも組織の規模を拡大してきた。そしてなによりも、別稿で詳述したように、七〇年代には葛洲壩ダムという当時中国最大の水力発電所の設計を担当したことで経験を蓄積した[55]。そして長弁は、長江流域を管轄する機構として「大した存在だ」と李先念に高く評価されたように最高指導層からの評価も高かった[56]。

じつは、銭正英は後年、「それまでの政治運動のなかで、三峡ダムに反対したがため（批判され）打撃を受けた人はひとりもいなかった」と語っている[57]。しかし、八八年に出された水電部党組の名誉回復の通知はきわめて明確な見解を示しているのに加え、水電部門の人間、たとえばのちに銭正英とともに三峡ダムを推進した李鵬や潘家錚でさえも迫害の事実を認めている[58]。そもそも党の正式文献の形によって正式に李鋭に連座した水力発電部門の幹部と技術者の名誉を回復したのは、銭正英が同年三月に水電部長を離任する直前であったことも興味深く、政治運動によってもたらされた複雑な人間関係と水利と水力発電の両部門の軋轢が見え隠れする。

② 河川開発の主導権をめぐる攻防

長弁は水電部の分割の動きと関連して、七九年二月に中央に対して水利部の下部組織から離脱し、権限の大きい国務院の直属組織となる「長江流域規画委員会」への「復活」を求めた[59]。林一山による長弁の格上げ要求の背景には、「米国（内務省）開拓局と陸軍工程兵団（United States Army Corps of Engineers, 略称：USACE）をモデルに、大型の総合的な水利プロジェクトを建設し、その発電を電力部門に売り、また水運やその他の用水部門から使用費を徴収する」という構想があった[60]。このように、長弁は組織を格上げし三峡ダムのような大型ダム建設の主導権掌握を目指そうとしていた。

それに対して、李鋭は翌月五日に「国務院領導」に書簡を出し反論した[61]。そのなかで、李鋭は、林一山が復活を目指す「長江流域規画委員会」は終始存在しなかったこと、また「長江流域規画弁公室」は日常業務が事実上一貫して元水電部の管轄下にあり、国務院の管轄でも周総理の所管でもなかったこと。周恩来は重大な原則問題および至急に処理する必要のある事項に口を出すにとどまっていたことから、むしろ「長弁」を取り消し、元水利部管轄の「長江水利委員会」に戻すべきであると主張し、林一山の提案に対して、制度も異なる米国のやり方をまねることは混乱を引き起こすと牽制した。

この反論を受けて、林一山は同年六月二日に再度「王任重並びに国務院」に対して書簡を出し反論を行った。そのなかで林一山は「（王）任重同志が私に意見を出すようにと述べた」として王任重の支持を強調した[62]。

じつは、王任重はその直前にダムサイト選定会議のため武漢に滞在していた。水利部門の関係者のみが参加した会議では、他部門からの批判があるとの報告を受けた王任重は、水利部門の人間が「大人し過ぎる」と繰り返し、やり返すようにと強い口調で指示していた[63]。林一山の反論もそうした王任重の指示にしたがったものであろう。

他方、李鋭のほうも林一山が七八年一二月二三日の『人民日報』に寄稿した「毛沢東指明了征服長江的方向」について、「三峡ダムをめぐる論争を完全に隠している。林君は私がこの世にいなくなり、あるいは永遠に口を噤んだとでも思っているのかもしれない」、「嘘を暴いてやる」と失脚中のまだ不自由な身の上でありながら、林一山への競争心をあらわにしていた[64]。

とはいえ、李鋭の復帰は大変な思いをしてようやく実現したものであり、失脚の原因ともなった三峡ダムについての発言には慎重にならざるを得ないのが普通である。ところが、彼は復帰の直後から三峡ダムに対する異議申し立てを再開した。彼は後年、「七九年の復職後に、陳雲同志が私に三峡ダムに関する意見を書くように指示した。彼は三峡ダムに問題が生じれば必ず国家の安定に影響すると言っていた」と陳雲の懸念を明らかにし、自らの行動が陳雲によって指示されたものであると公言した[65]。

そして、河川開発の主導権をめぐって林一山と李鋭が最高指導層にさながら「書簡合戦」を展開していたのに合わせて、電力工業部長劉瀾波と李鋭は、水力発電部門の研究機関の再建に積極的に乗り出した。七九年七月に電力工業部内において水力発電を総括する「水力発電総局」を復活させ、張鉄錚を局長、張昌齢を総工程師とし、全国の水力発電建設の測量調査、設計と施工の一元化を図ろうとした[66]。

これは、水電部門が水力開発の主管部門として「水力発電総局」を再整備し、全国の水力開発の管轄を目指そうとした動きであった。むろん三峡ダムのような大型水力発電所も管轄下におくと想定されており、水利部門とりわけ長弁との河川開発をめぐる主導権争いがより現実的なものになったといえる。そうした水力発電部門の動きは、後述する同年一一月に水利部党組が性急に三峡ダムサイトを決定した遠因のひとつになったものと推測される。

第三節　李先念と王任重主宰の四月二六日国務院会議

1　王任重の役割

前述したように、林一山は七四年から一貫して三峡ダムを討議する会議の開催を中央にも求めてきたが、実現しないままであった。王任重は職務に復帰して数か月後の七九年四月一〇日に、林一山の李先念宛て書簡を同封して、華国鋒、鄧小平と李先念に対して、「三峡ダムについて報告を聞くように」と促した。同時に、「建設案を決定し、可及的速やかに着工し、九〇年から九一年に大まかな完成を目指す」ことを求めた。それに対して、鄧小平は「わたしは賛成だ。陳雲、先念同志が決めてください」と指示した。それに対して王任重は、「（李）先念同志が時期を決めてください」と「批示」した(67)。

王任重のアプローチによって、同月二六日に三峡ダムを検討する国務院会議が李先念の主宰で開催された。王震、王任重、陳永貴、谷牧、康世恩ら副総理六名、中央各省庁と各委員会および長江沿岸の省と市の第一書記が参会し、林一山と魏廷琤が報告を行った(68)。

2　会議での意見対立

①　三峡ダムの安全保障問題をめぐる王震と趙紫陽の意見相違

ダムサイトの選定にあたって最も懸念されるのは安全保障問題であったが、入手が叶った資料では、これに言及していたのは王震と趙紫陽のみであった。しかし、真っ向から対立する二人の意見は、当時最高指導層における三峡ダムの安全保障に関する認識の違いを如実に語っているように思われる。

王震は、「ダムが爆撃されて、たとえボロボロ、粉々になっても、流れる水量はあれだけだから。人防（「人民

防空」の略、空爆を防ぐという意味――筆者注）と言っても、絶対的な安全が確保できる建築物はないはずだ。戦争が終わってまた建設すればいい」との考えを示した。

一方、趙紫陽は、「ダムへの空爆は考慮しなければならない問題である。このような大型ダムは、戦時の空爆を想定しなければいけない。放水だけでは問題の解決にならない。（中略）。大型ダムの存在は、下流の都市にとっては大きな負荷になる。中央は慎重に考えなければならない。これは全局の問題であり、非常に不利な弱点になる。それに絶対戦争が起こらない保証はない」と強調した。

じつはこの問題について、万里も八二年一〇月に葛洲壩ダムを視察した際に王震と同様の見解を示している。つまり、「ダムサイトの選定は施工と材料の利便性を考えなければならない。とにかく資金を省くこと、無駄を省くことと時間を省くことだ。ミサイル攻撃の防御は関係がない。あってもなくても同じだ。人間がいなくなるのだからダムのことを言っても仕方がない。戦争になれば、まずは武漢を攻撃するだろうが、戦争は必ずしも起こるとは限らない。起こっても必ずしもミサイル攻撃になるとも限らない」と述べた(69)。

② 趙紫陽の延期提案と銭正英の洪水対策の強調

趙紫陽は自分が「三峡ダムの反対派ではない」ことをことわったうえで、ダムの投資、立ち退きと安全保障問題について意見を述べた。彼は、「三峡は資源であり必ず開発する必要がある。遊ばせておく手はない」とする一方、「建設時期は、国民経済の現状と国家の財力を考慮しなければならない」とした。彼は林一山の立ち退き案に同意したが、長弁が示した予算については「倍以上あっても足りないだろう」と指摘した。また、「もし八一年に着工とすれば、四川省東部にとって大きな困難となるであろう。計画が決まると、人心が不安になる。（中略）。また、われわれがこの一〇年で使える資金は誰でも知っているようにこれだけのものしかない。それを

一点に集中したら、ほかのことはもうできなくなる。全局の観点から考える必要があり、性急に決めてはならない」との見解を示した。

したがって、趙紫陽は「三峡ダムには慎重に対応しなければならない。すぐ着手するのか、先に延ばすかは一考するべきである」と述べ、三峡ダムに先立ち、「（四川省）宜賓より上流の、開発しやすい河川に先に着手すること」を提案した。

このように趙紫陽が指摘した、投資と国力の問題、三峡ダムと長江上流の支流でのダム開発の優先順位は、まさにそれまで李鋭らの水電部門と林一山ら推進派が議論を戦わせてきた問題であった。

それに対して、銭正英は、「現在三峡ダムを提起しているのは、まず長江の洪水のためである。もし水力発電のためなら、たしかに（趙）紫陽同志の言う通り、必ずしも三峡でやる必要はない」と反論した。

銭正英は、毎年長江の洪水問題に悩まされている水利部門の苦衷を訴え、このように告白している。つまり、「この二〇年で長江の状況をどれぐらい改善できただろうか？　それを中央に説明しなければならない。われわれの力が限られているばかりに、抜本的な解決が叶わず、できたのは漢江の改善と、五四年型の洪水に対応できるように各省の堤防を高くしたことぐらいである。長江の治水は進歩していない。それは何故か？　こんなことでは水利部門の人間は手を抜いていたと言われかねない。万が一今年洪水が一発くれば、世論が騒然とするだろう」。

銭正英は、長江の治水が進まない背景に、三峡ダムが実現しないからではないかといわんばかりの口調で、長江中下流の治水には三峡ダムしか手立てがないと力説した。

彼女はつづけて、「二十数年来、いろいろな方法を検討し、論争もしてきた。（中略）。洞庭湖の整備をはじめ許可が下りなかったものもあれば、造ったものの完全な問題解決にはならなかったものもある。なぜなら、洪水

の量は常に予想を上回り、下流の湖、貯水池や川で解決できる問題ではないからだ」と説明し、上流からの洪水をコントロールするために三峡ダムの建設が不可欠であると求めた。

いわく、「現在の方法は、（上流の）計画的な水没をもって、（下流の）予測不能な水没に代えることである。長江の主要な暴雨は主に四川省東部と湖北省の西部にあるため、金沙江、大渡河でダムを造っても洪水対策にはならない。この二〇年の経験から、本気で長江中下流の洪水や水害の問題を解決するには、三峡ダムに頼るしかないことは明らかなのだ。しかも、三峡ダムを以てしても一〇〇年に一度という基準以上の洪水には、やはり完全に対応することはできない」。

じつは、林一山は後年、銭正英がその時「三峡ダムを造らずに、長江の洪水問題を解決する方法を知っている人がいれば、私は跪いてもよい」と激高したと回顧している。(70)

銭正英は長江中下流の洪水問題の解決には三峡ダムしかないと確固たる意志を表明し、慎重な姿勢であった趙紫陽に盾突いた様子であった。しかし、別稿で詳述するように、八〇年代に入り、国務院副総理、のちに総理になった趙紫陽の指導下で発電のために三峡ダムが動き出すと、銭正英は治水の役割を十分に果たさない正常貯水位一五〇メートル案に積極的に関わった。三峡ダムに対する銭正英自身あるいは水利部門の立場を垣間見ることができよう。

結果的に会議では激しい議論があったものの、李先念は、「三峡ダムを造ることに同意するが、八一年に必要な資金を工面できるかどうか、今後三年間の経済調整の情勢を見る必要がある。（中略）。この問題は非常に大きい。今日の会議では結論を出すことは不可能だ。（中略）。このような大規模のプロジェクトは弁論を行い、問題をクリアにしなければならない。中央で討議しなければならない」と述べながらも、林一山に三峡ダムサイト選定会議の主宰を指示した。(71)

この会議で最後に、李先念は三峡ダムについて慎重であるべきとの姿勢を見せつつも、「自分は華国鋒と相談したが、三峡ダムを造るか否かにかかわらず、まずは水面下の工事を始めて、七九年後半から八〇年前半までには最後の計画を出そう」と国務院総理華国鋒を「担ぎ出して」、長弁が求めていた水面下の工事の着工を認め、実質三峡ダムを推進する方向に結論を持っていった。[72]

第四節　五月の三峡ダムサイト選定会議

1　王任重による「八一年着工」の説得

七九年五月一二日から二四日まで林一山主宰で武昌において「三峡水利枢紐壩址選定会議」が開かれ、関連部門から約二〇〇人の幹部と技術者が参会した。

王任重は五月一五日に参加者全員に接見し三峡ダムサイトの決定を強く促した。[73]

第一に、彼は「私は三峡ダムの積極的な推進派である」と開口一番に表明し、終わりには「三峡ダムの完成を見ないことには死んでも死にきれない」と締め括り、三峡ダム支持の立場を明らかにした。

第二に、三峡ダムの建設は毛沢東と周恩来の宿願であり、「四人組」の妨害がなければとうに完成していたこと、また現体制の最高指導層も三峡ダムの早期建設に同意していると繰り返し述べ、参会者の同調を促した。

王任重は自ら華国鋒、李先念、陳雲、鄧小平らに書簡を送り、三峡ダムの建設は早ければ早いほうがいいと報告し、彼らから同意を得たと話し、「鄧小平同志はその書簡に『我賛成』の三文字を書いた。原本は銭（正英）部長のところにある」とも付け加えた。

第三に、三峡ダムの主な役割は洪水対策であることを強調した。つまり、「単なる発電なら、ほかのダムでも

よい。こんな大型ダムを造らずともよく、小型ダムを多く造るのでも構わない。（三峡ダムは）世界一の規模のダムではあるが、われわれがそれを建設するのは虚名のためではなく、主に洪水対策のためだ。大洪水が来れば、長江中流の何千万もの人民の生命と財産が危険にさらされる。全国で重点プロジェクトはいろいろあるが、このプロジェクトを一番に据えるべきだと私は思う」。

そして王任重は、「ダムサイトを決めよう。八一年に着工することはできないか？　どうしても無理なら、八二年でもいい。とにかく早ければ早いほうがいい」と繰り返し早急なダムサイトの決定と工事の着工を促した。とはいえ、後述するようにこの会議では王任重の主張は、賛同が得られたとはいいがたく、心労のためか彼は病に倒れ七月になっても武漢に滞在したままであった(74)。

2　異議の表出と新華社記者による内部報告

翌月、会議を取材した新華社記者により、「国内動態清様」（最高指導部で回覧される内部報告――筆者注）に議論の詳細が報告された。ここでは紙幅の関係上、最も重要な三点をとりあげる(75)。

第一に、「問題の所在は三峡ダムを建設する条件は整ったか否か、機が熟したか否かについての考えが一致していない」ことであるとし、長弁の長年にわたる取り組みは評価すべきであるが、三峡ダムの着工にはさらなるしっかりとした準備が必要であり、二、三年では無理であるとの意見が出された。

第二に、三峡ダムの役割をはじめ、砂堆積、水運、大型発電設備の製造能力、施工の準備および立ち退きなどの問題について異なる意見が出された。

特に、長弁が四月二六日の国務院会議に提出した「関於長江流域規画和三峡工程滙報提綱」において述べた、「三峡ダムは長江の治水能力をさらに高め、その洪水問題を抜本的に解決するカギになる」との見解については、

多くの参加者から反論があった。

たとえば、水利部工程管理処長柯礼聘は、三峡ダムは荊江堤防に対しては洪水対策の役割を果たせるものの「長江の洪水問題を根本的に解決するカギになる」とはいえないと指摘した[76]。つまり、長江での比較的大型の洪水は、往々にして上流、中流と下流において同時に発生することが多く、洪水量が大きいうえ持続時間も長いので、洪水貯水量（約）三七〇億立方メートル（正常貯水位二〇〇メートルの場合――筆者注）の三峡ダムだけでは大洪水のコントロールは不可能だというのである。

また、黄河水利委員会顧問方宗岱は、三峡ダムは武漢より下流の地域の洪水対策にはならないとし、長江中下流における洪水対策の重点は武漢市にあるべきで、武漢の安全を保つためには、荊江の北に永久的な遊水池を開拓することを検討すべきだと提案した。

加えて、立ち退き住民の問題について、これは相当に重要かつ複雑な問題であり、社会の安定とダム建設の進捗に直接影響するものであるにもかかわらず、林一山の報告では、農村の立ち退きに言及するのみで、街や工場への配慮が欠落していることが指摘された。多くの参加者は長弁の見積もった三〇億元という立ち退きの関連予算は実事求是ではないと強く反発し、六〇億元でも不足する可能性があると反論した。さらに、三峡ダムの環境に対する影響や砂堆積についても懸念が示された。

第三に、会議主宰者の高圧的なやり方への反発や危惧が表明された。会議の合間に参加者は最高指導部の決定が倉卒であったと話し、長弁の報告と「某部長」（水利部長銭正英を指すと思われる――筆者注）の承諾だけで三峡ダムの着工を命じるのは、人民に対する無責任の現れであると指摘した。また、年配の教授や専門家は、異論を唱えることで三峡ダムの反対者とのレッテルを貼られることを危惧して会議の席上での発言がきわめて慎重であった。

そして、この報告の最後は、「立ち退き問題の複雑さに鑑み、ある代表は会場外において、『目下のわが国の資金、物資の調達に困難がある状況では、趙紫陽同志が四月二六日の国務院三峡ダム報告会で提案した、三峡ダムを「緩建」する案が重視するに値する』と話した」と結ばれていた(77)。

3　李先念の反応

李先念は数日後にこの報告を添付して、銭正英、劉瀾波、王林（電力部副部長）、林一山宛てに指示を出した。それは国務院財政経済委員会（以下、国務院財経委員会）主任陳雲をはじめ、その構成員である姚依林、余秋里、王震、谷牧、薄一波、王任重、陳国棟、康世恩、王勁夫、金明にも回覧された(78)。

この指示は二段落になっているが、第一段落は四月二六日の会議について、「関係部門からの報告を聞いてそれに基づき研究と討論を行っているだけで、各方面から意見聴取を始めたところであり、決して直ちに着工するとは決定していない。私はこのプロジェクトを支持している。しかし、このプロジェクトは規模が大きく、多くの部門が関わっており、施工の技術も大変複雑である。建設する場合、十分な準備を行わなければならず、より良い建設計画案を提出し、国務院財経委員会の研究と討論を経て、中央政治局に決定を委ねることになる」と述べられている。

これは、四月二六日の会議に参加しなかった陳雲に向けて発せられたメッセージであったと思われる。つまり、李先念自身は三峡ダム建設を決定せず、陳雲の率いる国務院財経委員会と党の最高権力機関である中央政治局に委ねると強調したものであった。

というのも、この時期、最高指導層では、陳雲が李先念にとってかわり経済業務を仕切るようになっていたと思われるからである。三月二七日、中共中央が出した通知では、「陳雲が主任、李先念を副主任、姚依林を秘書

長とする国務院財経委員会を設立する。財政と経済工作に関する方針と政策を研究し、重大な政策の決定を行う機関とする」とされている。[79] つづいて、七月一日に開かれた第五期全人代常務委員会第九回会議は中共中央の決定に基づき、国務院財経委員会の設立を追認し、余秋里、王震、方毅、谷牧、薄一波、王任重、陳国棟、康世恩、張勁夫、金明を委員とすることを決定した。[80]

その一方、第二段落では、「三峡ダムは国内の水力発電史上において稀に見るケースであり、建設過程において必ず想定外の問題に遭遇する。洪水対策、灌漑、水運、養殖、砂堆積、一〇〇万キロワット水力タービン発電機、超高電圧送電設備、一万二〇〇〇トン重量の船舶昇降機などの課題について、期限を定めて成果を出すことができるか否か。たとえば、八一年までに筋道をつけるなり肯定的な意見を出すことはできるか」としたうえで、「それに、立ち退きの問題と施工準備もきちんと研究し、具体的な計画案を出すように。各方面がこれらの仕事をしっかりやり、三峡ダムを建設するために条件を整えること」と、「八一年までに」という期限を設け研究の加速化を促した。

王任重によるダム選定会議での「八一年までに着工できるように」との言及からも、三峡ダム推進派の間では八一年を目標として設定していたことが明らかである。

4　陳雲の指示による李鋭の意見書

じつは、前述のダムサイト選定会議の開催時に、李鋭は北京で全国電力工作会議に出席していたため参加していない。[81] しかし、彼は七月一二日に陳雲の指示を受けて意見書を作成している。[82] 新華社記者の報告と李先念の弁明にもかかわらず、陳雲が李鋭に意見書を書かせたのは李先念らの動きを牽制するためであると思われる。李鋭は主に下記三点について意見を述べた。

第一に、五月のダムサイト選定会議において、「主宰者は三峡ダムが八一年または遅くとも八二年に着工すべきと中央領導同志が決心したと公言した。そのために二十数年間沈黙していた懐疑的または反対の意見が噴出した」と報告した。

第二に、「三峡ダムは世界的に名高い水力発電所であり、電力開発に従事するものであれば誰もが夢を見る。しかし、三峡ダムの建設時期は国家の経済および技術的な条件によって決定されるべきである」と持論を展開した。彼は限られた資金を三峡ダムに持っていかれることを問題視しつつも、三峡ダムの発電能力に魅力を感じるという水力発電部門の人間の偽らざる気持ちを率直に語っている。

第三に、李鋭は、「三峡ダムによって長江の洪水問題が抜本的に解決できる」という林一山の主張について、「三峡ダムだけに頼っては長江の洪水問題は解決できない。また経済的にも合理的ではない」と指摘した。また彼は、三峡ダムの治水能力に限界があり、むしろ堤防と遊水池（「分洪区」）の整備がより重要であると主張した。

具体的に李鋭は、まず長江中下流沿岸の分水に関する歴史的な変遷を紹介した。つまり、「宋代以前は、長江（具体的には長江の中游にあたる荊江を指す――筆者注）の南岸と北岸に九穴一三口の排水溝があって両岸に広がる地域に洪水を分散していた。明清以来、長江の南岸を犠牲にして北岸を守る考え方に基づき、堤防は南が低く北が高くしてしまい、最後に残った南岸四つの排水溝（松滋、太平、藕池、調弦）によって洞庭湖に分水した。その結果、洞庭湖は堆積によって面積が狭くなりまた土地が肥沃になった。他方、荊江の北岸は分水されず堆積もない。それゆえ、荊江堤防は増水期になると危険地域と化し、決壊すれば、「数十万、数百万の人が非業の死に」というのが三峡ダムを是が非でも早く建設したい最大の理由となった」。

つづいて、李鋭は、荊江の北岸地域の広大な耕地と四〇〇万の住人を保護すべきであるとしたうえで、三峡ダムの果たせる役割が限られていることを指摘した。

つまり、「三峡ダムの洪水貯水量（原語：防洪庫容）は三七六億立方メートル（正常貯水位二〇〇メートルの場合――筆者注）しかなく、その役割が限られる。（中略）。たとえ三峡ダムがあっても、荊江堤防はけっして心配がないというわけではなく、依然として整備と保護の必要がある」。したがって、「堤防と洪水を吸収する遊水池の役割は、三峡ダムがとってかわることができず、三峡ダムの建設か否かにかかわらず、その工事の強化を継続させなければならない」と強調した。

最後に李鋭は、「中央同志が重要な指示を（前出の李先念六月二二日指示と思われる――筆者注）行ったため、三峡ダムが性急に着工されることはない。解決しなければならない多くの問題について引き続き真剣に研究し、異なる意見の聴取を求めるその指示によって、三峡ダムの議論が正確な道に導かれることを信じたい」とした。彼は復帰したばかりの身であるゆえ三峡ダムに対してはっきりと反対の意見を示すことはなかったが、推進派の動きにくぎを刺した。

李鋭は冒頭で、職場復帰して半年もたっていないために、情況は把握できておらず資料も不足しているとことわったが、この意見書の内容は詳細であった。李鋭が北京に到着した当日から、旧知や連座された元の部下を含め、連日多くの人が訪ねてきたが、水利部門の銭正英と「招かれざる客」とされた王化雲（黄河水利委員会主任）以外はほとんど水力発電部門の部下であった[83]。彼らが李鋭に三峡ダムの状況や材料を提供したと考えられるが、こうした李鋭の求心力もさることながら、水力発電部門の結束力は、八〇年代以降三峡ダムの政策形成に大きな影響力を及ぼすことになる。

第五節　米国の資金援助をめぐる水利部門と水力発電部門の軋轢

じつは米中国交正常化より早い段階の七三年四月に、葛洲壩ダムの閘門技術など重大な技術問題を解決するために、「水利プロジェクト視察団」が米国に派遣され、約二か月にわたってテネシー川をはじめ六つの河川と二七のダム関連施設を視察した[84]。

また、七八年に米国 Allis-Chalmers 社総裁 David Scott 氏から鄧小平宛てに、三峡ダムに大型発電ユニットを提供したいとの申し入れがあった[85]。米中両国政府は、翌年一月三一日の鄧小平の訪米中にワシントンで科学技術協定を締結した[86]。同年五月に国務院能源代表団が米国で九日間滞在し、水力発電所を五か所視察した[87]。

八月二〇日、李先念は国家科学委員会、水利電力部（原文ママ、この時点で水利電力部はすでに分割されていた――筆者注）、外交部の「関於签訂中美両国水電和有関水資源利用合作議定書有関問題的請示」に「協議を調印することに同意するつもりだ。ご『批示』を」と華国鋒、鄧小平に回した[88]。

つづいて同月二八日に、鄧小平と米国 Walter Mondale 副大統領が北京で「中華人民共和国和美利堅合衆国政府水力発電和有関的水資源利用議定書」を調印し、米国から二〇億ドルの借款を受けることが決められた[89]。

この借款をめぐって水力発電部門と水利部、長弁の間で軋轢があったことを林一山が後年認めている[90]。当時、鄧小平、姚依林、李先念、王任重ら最高指導層の間でやりとりされた書簡から、彼らが両部門の争いに手を焼いた生々しい様子がうかがえる[91]。

一一月八日に、王任重は李先念宛て書簡において、「水利部は三峡ダムを（米中協力）のプロジェクトとして、長弁の人間が米国との交渉に参加できるように要求している。しかし、電力工業部は三峡ダムを盛り込まずに、長弁の参加も断っており、これは妥当ではない。ご考慮のうえ決定を望む」と仲裁を要望した。李先念はその書

簡を鄧小平に回した。

鄧小平は、「交渉には当然長弁も参加させるべきだ。長弁に参加させるのみならず、これほどの大規模なプロジェクトなのだから、専門家会議を組織して定期的に討論を行うべきだ」と「批示」した。李先念はそれに基づき、「劉瀾波同志が閲覧するように。（鄧）小平同志の指示にしたがって進めるように」と電力工業部長である劉瀾波に指示した。

後述するように、劉瀾波は一一月二三日に中央に対して返答したが、李鋭はそれに先立って一六日に王任重の書簡を同封して姚依林に報告した。

「鄧小平の王任重書簡への『批示』は、大事業である三峡ダムについては、さらに会議を開催し多くの討論をしなければならず、すでに決定済みで着工を待つ水力発電部門のプロジェクトだとは言っていないと理解すべきだ」と李鋭が強調した。

また米中交渉の内容について、李鋭は、「三峡ダムは長期計画の対象であり、科学研究プロジェクトに組み入れるが、独立した建設プロジェクトにしない予定である」とし、「目下資金の調達がきわめて困難であり、限られた外資はすぐに役に立ち、最も必要とされかつ堅実なプロジェクトに投入するしかない。三峡ダムの問題は大きすぎる。中央が慎重に考慮することを求める」との見解を示した。

一一月二二日に李先念が余秋里、王任重、谷牧と姚依林に対して、「三峡ダムの可否について論争が激しく、双方は意見を譲らない。この件で、実に頭を痛めている。このプロジェクトは、どう見ても国の財政ではまだ考えられないが、しかし米国との交渉が関係している。財経委員会が時間をつくって再度討論して、中央に決定を委ねることを提案する」と李鋭の書簡に「批示」して回した。ここで、李先念は政策決定を急ぐ背景に「米国との交渉が関係している」ことを強調している。

翌日、劉瀾波は最高指導層に対して、「米国代表団の来訪時に、三峡ダムを科学研究プロジェクトとして米中協力の交渉に組み入れることについて、電力工業部はすでに一一月七日に国務院への報告で説明している。米国との交渉には、水利、交通などの関連部門がすべて参加する必要があり、長弁は水利部の下部組織であり当然参加する（ものと考えている）。そのため、特別な説明を付け加えなかった」と長弁を排除していないことを説明し、王任重の訴えを退けた。

李先念は同日にこの報告を谷牧に回し、前日に李鋭の書簡に「批示」したことを告げた[92]。後述する水利部によるダムサイトの決定は、まさにこうした激しい応酬のなかでなされたが、米国からの二〇億ドルの借款が三峡ダムサイトの政策決定に大きく影響したことは明らかである。

第六節　水利部党組による三峡ダムサイトの決定と背景

1　九月の「三峡ダムサイト選定会議報告会」における安全保障の議論

同年九月六日に、水利部党組が国務院の委託を受けて、銭正英の主宰で「三峡ダムサイト選定会議報告会」が河北省廊坊地区招待処で開催され、国家建設委員会、電力工業部、交通部、第一機械工業部、地質部など国務院関連部門と委員会、大学と研究機関、工程兵、葛洲壩工程局と長弁などの組織から四一名が参会した[93]。六つの「専業組」の責任者がそれぞれ五月のダム選定会議における討議状況を報告し討論を行ったが、一致した意見は得られなかった[94]。

そのため、会期は一三日まで延長され参会者も約七〇人に増やして拡大会議が開催された[95]。この会議で三峡ダムの安全保障に関する議論をする予定であったにもかかわらず、関連資料は提供されていなかったため、参会者

から資料の公開が求められた。それに対して、銭正英は急遽研究を主に担当した水利水電科学研究院から資料を寄越し、そのテーマについて二日間議論するよう指示した[96]。

資料の関係上、議論の全容は把握できないが、「依然として意見の一致が得られなかった」ことを長弁の内部資料と関係者が認めている[97]。

ここではある参会者の発言原稿を通してダム安全保障に関する議論と反応の一端を見てみたい[98]。

安全保障の専門家である殷子書は国外のミサイル開発に関して、「現在最も先進的な大陸間ミサイルの命中率の誤差は半径約三〇メートルしかない。それは三峡ダムのような大型建造物にとって、あまりに厄介でどうにも防ぎようがない。ただし、第二次世界大戦中にドイツが欧州のあるダムを爆破し死傷者を出したが、戦局には影響はなかった」と紹介した。

柯礼聃は殷子書の発言を踏まえ、「現在はすでに八〇年代に入っており、先端技術による戦争の場合、なにを第一次戦略的攻撃目標とするだろうか。ダムは選択されない可能性が大きいと思う。敵方の指揮系統の中心もしくは司令センターである戦時通信システムが標的になるであろう」との認識を示した。したがって、「三峡ダムは安全保障の問題を考慮すべきであるが、ミサイル攻撃を回避する術はなく、むしろ緊急事態のなかでいかに放水を行い、水位を下げるかを研究するべきである」と結論づけた。

会議を主宰した銭正英は、「資料と会議での意見を総合すると、ダムの安全保障を重視する（防御方案）なら、太平渓がよりよく、通常の設計案（常規方案）なら、三闘坪が理想である。ふたつともいいダムサイトであるが、地形が異なるためそれぞれのメリットとデメリットがあることを認めなければならない。議論を重ねてきたが、両者には原則的な違いはなく、中央からの委託のため結論を提出しないといけない。たとえば、三闘坪を中心に初歩設計を行い、太平渓を予備にするのはどうか。あるいはその逆でもよいし、暫定的な結論は出さず、引き続

き検討を経て決める」と総括した[99]。

2　水利部党組による候補地三闘坪の決定

五月のダムサイト選定会議に引き続き、九月の報告会でも三峡ダムサイトに関して意見の一致が得られなかった事態を受けて、水利部門と李先念や王任重の間でいかなる検討がなされたかは不明である。しかし、水利部党組は、同年一一月一五日に水利部党組拡大会議を開催し、三闘坪を三峡ダムサイトとして提案した。会議の結論として、「関於長江三峡水利枢紐工程壩址選択和做好前期工作的報告」（（七九）水弁字第五九号文）がまとめられ国務院に提出された[100]。

第五九号文は、三闘坪と太平渓について、「地質部はふたつのダムサイトの地質条件に差はないとしているが、交通部と（水電）工程兵四所はそれぞれ三闘坪と太平渓に賛成している。絶対多数の同志は、通常の設計なら三闘坪はメリットがあり、安全保障の観点では太平渓の条件が優れていると論じている」と報告した。

また、「ダムの安全保障を担保するために、三峡ダム本体の断面を拡大する必要があるかどうかについて、多くの同志は国内外の経験から判断してそれが必要ないとし、むしろ、（戦争を）予測して事前に放水し水位を下げることが最も有効な措置である」とした。

最後に、「以上の討論状況に基づき、関連部門の意見を考慮し、われわれは三闘坪を三峡ダムサイトとして初歩設計を進めることを提案する」と結んだ。

つづいて、水利部は同月二八日に、水利部（七九）水弁字第三六号文をもって国務院および最高指導者に「関於興建三峡水利枢紐的建議」を提出した[101]。

第三六号文では主に三つの提案がなされた。第一に、三闘坪を三峡ダムサイトに推薦すること。また、三峡ダ

ムを「四つの現代化」建設におけるひとつの重大な戦略的プロジェクトとし、九〇年代に完成することを目指すこと。第二に、中央ができるだけ早く検討し決定を下すこと。第三に、三峡ダム建設の準備工事（原語：長江三峡水利枢紐前期工作）を米中技術協力の重点プロジェクトにすること。

一方、水利部の動きを受けて、電力工業部文件（七九）電計字第二二六号「関於做好長江三峡水電站前期工作的意見」を出し、異議を唱えた[102]。すなわち、「目下三峡ダムに関して依然として非常に複雑な問題がクリアになっていない」との認識を示し、「ダムサイト選定の問題に関しても、ふたつの選択肢からひとつを選んだが、意見分岐がまだ大きく機が熟していない。（中略）。多くの地道な仕事を行うことが必要であり性急に決定することなく、手間を省けるためにダムサイトを決めて簡略化しようとしてはならない」と指摘した。

しかし、水利部の会議後に、長弁は三峡ダムの測量調査、設計の重点を三闘坪に移した[103]。そして、八三年五月国家計画委員会が審査した「長江三峡水利枢紐可行性研究報告（一五〇メートル案）」において三闘坪は三峡ダムサイトとして正式に認められた。

3　葛洲壩ダムとの関係

水利部による三闘坪の決定は、とりもなおさず長弁が六〇年代から七九年九月の選定会議まで一貫して推薦してきた太平渓が放棄されることを意味する。長弁にとって、太平渓は六〇年に安全保障問題の懸念から計画中断を余儀なくされた苦い経験から、三闘坪のかわりに政策が通りやすいための便宜的な提案にすぎなかった。したがって、三峡ダムの安全保障への懸念が薄れたなかで、政策が進むものであれば、三闘坪も太平渓も長弁にとって受け入れられる案であったと思われる。

一方、水利部が三闘坪を選択したことには理由があった。

水利部には、八〇年に予定されていた葛洲壩ダムの堰き止め工事完了を以て宙に浮く、現場の施工労働者と現有の機材設備の行先を確保する必要があった。莫大な経済的な損失を避けるためには、これらを三峡ダムの建設現場に移行することが最も理想的な解決であったといえよう。実際、三峡ダムの推進派もそのように意図していたと思われる。

じつは、葛洲壩ダムで生じた施工問題や建設資金の浪費問題に関して、陳雲は七八年から現場の内部告発を受けて李先念に対して対応を求めてきた[104]。葛州壩ダムの浪費問題を調査した報告は深刻な濫費状況を認めている。つまり、「施工機材設備の利用率が低く、役割を十分に果たしていない。労働力も十分に発揮できずに手待ち時間の発生やサボタージュの現象が比較的深刻である。現場は二万台の設備と機具、一万台あまりの主要設備、六万人の従業員を有しており、非現場労働者を除けば、おおよそひとりに一台の設備と機具が割り当てられる状態である」[105]。

こうしたあり余る機材設備の投入先を決めなければ莫大な損失になるのは自明であった。というのも、葛洲壩ダムが七二年から七四年に工事が停止した際に、「労働者三万人、年三六〇〇万元が空費される事態に李先念が業を煮やした」ことは別稿で詳述した通りである[106]。推進派が「葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』である」と唱える背後には、こうした葛洲壩ダムの「遺産」の引き継ぎ先と損失の回避を期する事情があろう。

また、前述したように、葛洲壩ダムの建設を担った技術者と労働者の施工能力は、三闘坪の施工に比較的適応しやすいとの指摘もあった。つまり、葛洲壩ダムの機材設備と施工部隊の能力を考慮すると、複雑な工事を必要としない三闘坪をダムサイトにすることが現実的であった。こうした事情から、陳雲は三峡ダムに消極的でありながらも、推進派の動きを黙認せざるを得なかったのかもしれない。三峡ダムの決定を左右した安全保障の要素が水利部の抱える現実問題の解決のために消失し、三峡ダムの歴史におけるパラダイム転換が起こった。

おわりに

三峡ダムサイトは、約一五年間も迷走し、七六年に長弁は三闘坪と太平渓を取捨選択した結果、ミサイル攻撃からの防御に適した太平渓を推薦した。最高指導層でも関連部門の幹部と技術者の間でも意見が分かれていたにもかかわらず、七九年一一月に銭正英の率いる水利部党組が三峡ダムサイトを三闘坪に決定した。

本稿は、葛洲壩ダムの工事再開を受けて、林一山の率いる長弁が三峡ダムサイトの決定を促し最終的に三峡ダムの決定に持ち込もうとするなか、最高指導部と水利部がそれぞれの思惑によって性急に三峡ダムサイトを三闘坪に決定したことを明らかにした。

第一に、三峡ダムサイトを性急に決定しなければならなかったのは、七〇年代後半から一貫して存在した水力発電への期待と水利部と水力発電部門との間で発生した米国の資金援助の分配をめぐる競争であった。加えて、三闘坪が三峡ダムサイトとして選択されたのは、葛洲壩ダムの機材設備の再利用と労働者の施工能力を考慮し、施工の利便性を最優先した水利部党組の判断であった。

三峡ダムの防御に適した候補地太平渓の放棄は、六〇年代を通して毛沢東が強く示した三峡ダムの安全保障問題への懸念の希薄化を意味するものであった。施工上の利便性を根拠に三闘坪が採用されたことは、ダムの安全保障に対するある種の諦めと僥倖の存在が認められよう。その背景に、六〇年代の中国を取り巻く国際環境とは異なり、七〇年代末からの米中関係正常化による国際的な緊張関係の緩和、または人民解放軍の政策過程における影響力の低下があったと思われる。

第二に、政策決定に関与できるのは三峡ダムを推進する最高指導層と主管部門であり、きわめて限定されたアクターによる政策形成の空間である。それは、三峡ダムサイトの性急な決定を可能にしたひとつめの要因でもあ

ると考えられよう。

七〇年代後半、とりわけ七九年のダムサイト決定は、最高指導層では「経済工作の『秦始皇帝』」と称された李先念と王任重が主導していた。王任重は華国鋒や鄧小平などに働きかけ、長弁の要望した中央での三峡ダムを討議する会議の開催を実現させた。そして李先念と王任重は、四月二六日の国務院会議を主宰しダムサイト選定会議を決定したことによって三峡ダムの政策を大きく推進した。

主管部門のヒエラルキーの末端にある長弁は、七〇年代後半から林一山が葛洲壩ダムの再建を指揮するなかで、常に三峡ダムの実現を念頭に置き進めようとしてきた。長弁は六〇年に最高指導部のダム安全保障への懸念により計画が中断されたことの教訓として、水利部党組の決定直前まで安全保障に有利とされる太平渓を主張しつづけたことがその最たる例であったといえよう。

このヒエラルキーの閉鎖した政策決定の空間のなかで、最高指導層、水利部と長弁の間の意思疎通の手段は、下から上への要請や情況報告をまとめた書簡がある。その行為は「上書」と称される。一方で、「上」の意思表示は、その書簡の文面にコメント（中国語では「批示」という――筆者注）を書きいれることで行われ、政策の指示や関連の幹部へ協力の呼びかけがなされる。

この「上書」と「批示」という意思疎通のやり方は、制度化または慣習化された「非制度的」なものであるが、中国の政策決定過程に見られるひとつの特徴であるといえよう。

第三に、七〇年代後半からの電力不足問題に直面した最高指導層の意図は明らかに三峡ダムの発電能力の利用であった。また推進派とともに最高指導層は、葛洲壩ダムがいよいよ発電を開始し完成を迎えるなかで、その発電費による三峡ダム建設費の捻出に期待を寄せていた。事実、その機材設備と労働力を吸収する受け皿になる三峡ダムの魅力も大きかったであろう。それゆえ、水力発電への期待と葛洲壩ダムというふたつの要素は、三峡ダ

ムが九二年全人代で決定されるまで一貫して政策過程の底流に存在し、推進力となっていた。

また、推進派は三峡ダムの治水の役割を強調し建設を繰り返し主張したが、その治水能力に限界があることをしばしば指摘された。そのうえ、そもそも長江は五四年以降大きな洪水の被害がなかったためその主張は現実味を帯びなかった。にもかかわらず、この時点で政策が推進できたのは、湖北省と深いゆかりを持つ李先念と王任重が三峡ダムの治水機能に大きな期待を持っていたからであろう。

八〇年代になると、最高指導層の権力構造の変化を受けて、銭正英ら推進派は支持を得るために治水よりも水力発電の必要性を唱えなければならなかった。李先念の影響力が弱まり、彼の提唱する「高壩中用」案でさえも放棄され、最終的に発電を優先した正常貯水位を一五〇メートルとする「一五〇メートル案」が趙紫陽主導の国務院で決定された。じつはこれは、三峡ダムに期待する最たる機能が治水から発電へとパラダイムの転換がなされた決定でもあった。それについての検討は別稿にゆずりたい。

〈付記〉本研究は、二〇二〇年度慶應義塾学事振興資金（個人研究）を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

（1）拙稿「長江葛洲壩ダムの失敗と三峡ダム計画の再浮上―中国文化大革命期の国家建設における国務院業務組」『法学研究』第九三巻第三号、二〇二〇年三月。
（2）長江水利委員会档案館編『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三一頁、武漢長江印刷公司、一九九三年。
（3）拙稿「停滞と雌伏の三峡ダム計画」『教養論叢』（慶應義塾大学法学研究会編）第一三九号、二〇一八年二月。
（4）三峡ダムサイトが決定された以降は、ダムの正常貯水位をめぐって政策が大きく揺れ動いたが、この時に決定された三闘坪というダムサイトは一貫して踏襲された。三峡ダムを決定した一九九二年の全人代において、「最も有効

な措置のひとつは戦争の兆候が現れた際に、水位を下げての運行あるいは空になるまで放水することである」と報告された。

それに先だって、八六年から八九年まで進められた三峡ダムの論証に設けられた一四の専門課題にもダムの安全保障が入っておらず、「三峡工程人防小組」による検証に留まっていた。論証を指揮した潘家錚は最終報告のなかで、「戦時下の安全問題は、三峡ダムを決定する決定的な要素にならない」との見解を示した。

とはいえ、三峡ダムの安全保障への懸念は最高指導層にあったことを姚依林が認めている。また、政策決定圏外においてもその問題がしばしば指摘され、論争がくすぶることもあった。

出所：国務院副総理鄒家華「関於提請審議興建長江三峡工程的議案的説明（一九九二年三月二一日）」、「国務院関於提請審議興建長江三峡工程的議案説明的附件」『中国三峡建設年鑑（一九九四年）』三七、四四頁、中国三峡出版社、一九九五年。潘家錚「関於三峡工程論証情況的滙報（一九九〇年七月）」二三頁、未公刊印刷物。

「姚依林同志視察葛洲壩工程和三峡壩址時的談話記録（一九八二年一一月九日）」中文出版物服務中心編『中共重要歴史文献資料滙編』第三二輯、『改革与建設問題選輯』第一分冊『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』未公刊印刷物、（六）頁、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館所蔵、二〇一〇年。

黄万里「論長江三峡大壩修建的前提」中国科学院成都図書館、中国科学院三峡工程科研領導小組弁公室編『長江三峡工程争鳴集（総論）』一四一～一五〇頁、成都科技大学出版社、一九八七年、非公刊印刷物。

銭偉長「海湾戦争的啓示」『群言』一九九一年第四期。金戈「也談海湾戦争的啓示―同銭偉長同志商榷」『湖北日報』一九九一年五月二九日。または『百年三峡―三峡工程一九一九～一九九二年新聞選集』一六六～一六八頁、長江出版社、中国三峡出版社、二〇〇五年。

田方「周培源与三峡工程論証」『同舟共進』一九九五年第二期。楊波「懸頂之剣」戴晴主編『長江三峡工程報告書』一六六～一八三頁、新風出版社、一九九一年。本書の原版は次の図書である。戴晴主編『長江、長江―三峡工程論争』貴州人民出版社、一九八九年。達氷「従軍事角度看三峡工程」戴晴、薛煒嘉共編『誰的長江―発展中的中国能否承担三峡工程』一〇七～一一九頁、牛津大学出版社、一九九六年。

（5）『林一山回顧録』三〇三頁、方志出版社、二〇〇四年。
（6）Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg, *Policy Making in China: Leaders, Structures, and Processes*, Princeton University Press, 1988, pp.269-338. または、「綜述：三峡工程的決策与建設」陳夕総主編、劉栄剛主編『中国共産党と三峡工程』三～三〇頁、中共党史出版社、二〇一四年。武菲「三峡工程決策研究」中央党校（国家行政学院）、二〇一九年提出博士論文。拙稿「中国・三峡ダムプロジェクト―一九七〇年代後半の政策過程」慶應義塾大学、一九九五年提出修士論文。
（7）国家統計局工業交通統計司編『中国能源統計年鑑（一九九一年）』、中国統計出版社、一九九二年、および国家統計局編『中国統計年鑑（一九八一年）』、中国統計出版社、一九八二年。
（8）林一山、劉瀾波、李鋭など水利と水電部門の責任者があいついでメディアで河川開発と水力発電の重要性を訴えた。林一山「毛沢東指明了征服長江的方向」『人民日報』一九七八年一二月二三日。劉瀾波「電力工業必須変落後為先行」『人民日報』一九七九年五月一九日。劉瀾波は八一年に中央テレビ局の取材に対しても水力発電の必要性を強調した。中華人民共和国電力工業史叢書『中国水力発電史（一九〇四年～二〇〇〇年）』第一冊、四四二頁、中国電力出版社、二〇〇五年。李鋭「必須優先発展水電―中国能源政策中的一個重要問題」『人民日報』一九八〇年三月六日。
（9）一九七七年一〇月、水電部の報告を受けての発言。李代耕編著『新中国電力工業発展史略』二四五頁、企業管理出版社、一九八四年。
（10）「英明領袖華主席到密雲水庫参加労働」『人民日報』一九七七年一二月二日。
（11）『李先念伝』編写組と鄂豫辺区革命史編輯部編『李先念年譜（一九七〇～七八年）』第五巻、五九二頁、中央文献出版社、二〇一一年。
（12）同右、『李先念年譜』第五巻、五九二頁。
（13）本報評論員「水電建設要加快」『人民日報』一九七九年一月五日。
（14）「国務院領導聴取三峡水利枢紐情況匯報的有関記録（一九七九年四月二六日）」、長江档案館蔵、档案号A〇五―〇二―〇二一a―六六六。出所：前掲、武菲「三峡工程決策研究」六七～六九頁。

（15）前掲、『中国水力発電史（一九〇四年～二〇〇〇年）』第一冊、四三五～四三六頁。

（16）「李先念副主席谷牧副総理聴取葛洲壩工程滙報時的重要指示（二）（一九七八年一月七日）」、前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一八二頁。

（17）前掲、『李先念年譜』第五巻、三九八頁。中共中央文献研究室編『周恩来年譜（一九四九～七六年）』下巻には、この発言の記述はない。

（18）同右、『李先念年譜』第五巻、五七二頁。

（19）章重著『東湖情深―毛沢東と王任重一三年的交往』三三二頁、中共党史出版社、二〇〇四年。

（20）同右、『東湖情深―毛沢東と王任重一三年的交往』三頁。

（21）張治中、余湛邦『張治中与毛沢東―随従毛主席視察大江南北』七頁、陝西人民出版社、二〇〇四年。

（22）王任重が「七九年に中央に異動し国務院副総理の職につき、三峡ダムを分業で主管した」とする記述があるが、誤りと思われる。王任重が北京に異動したのは七八年一二月であったこと、またそもそもこの段階で三峡ダムは中央の政策決定過程に登場しておらず、その主管を決めることは考えにくい。前掲、武菲「三峡工程決策研究」六六頁。

（23）この一連の資料は「李先念副主席、陳雲副委員長、谷牧副総理対葛洲壩工程質量問題的批示」にまとめられている。前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二〇九～二一〇頁。

（24）「李副主席看『葛洲壩簡報』一二八期後給葛洲壩同志們的一封信」、「銭部長批示」、前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二一一～二一二頁。この手紙は、下記文献にも所収されている。前掲、『李先念年譜』第五巻、六七二頁。

（25）前掲、『中国水力発電史（一九〇四年～二〇〇〇年）』第一冊、四三四頁。

（26）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三一頁。「李井泉副委員長視察工地時的講話」前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一六八頁。

（27）拙稿、「一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画」『法学研究』第九〇巻第二号、一～二九頁、二〇一七年二月。

（28）「葉剣英同志視察葛洲壩時的講話」前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二一四頁。

（29）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三二頁。魏廷琤もこの視察団の一員であった。

（30）じつは、冷戦体制下で米中が接近するなかで七三年四月二〇日から六月一四日まで、長弁の魏廷琤も参加した米国への視察団が組まれた。それは周恩来がキッシンジャーに協力を要望して実現したものであり、対外的に「水利プロジェクト視察団」と称したが、こちらは葛洲壩ダムの通航問題解決を目的とし、米国の閘門を視察するものであった。出所：魏廷琤「美国参与三峡工程始末」『中国共産党与三峡工程』四〇六～四〇七頁。魏廷琤「葛洲壩十年」高永中主編『中国共産党口述史料叢書』第二巻、九七頁、中央党史出版社、二〇一三年。また、前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」五三頁。

（31）「葛洲壩工程技術委員会会議報告」第六回～第一〇回、楊世華主編『林一山治水文集之二：葛洲壩工程的決策』四四一～四六六頁、湖北科学技術出版社、一九九四年。

（32）前掲、拙稿「停滞と雌伏の中国三峡ダム計画」。

（33）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三〇～三一頁。

（34）同右、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三一頁。

（35）「技術委員会第七次会議的報告（一九七五年七月二八日）」、「技術委員会第九次会議的報告（一九七七年三月三〇日）」、前掲、楊世華主編『林一山治水文集之二：葛洲壩工程的決策』一五四、一六九頁。

（36）「李先念副主席、谷牧副総理聴取葛洲壩工程匯報時的重要指示（一九七八年一月七日）」前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一九三～一九四頁。

（37）同右、「李先念副主席、谷牧副総理聴取葛洲壩工程匯報時的重要指示（一九七八年一月七日）」一九三～一九四頁。

（38）「長江三峡工程前期工作大事記」『長江誌季刊』二二頁、一九八七年増刊号。または魏廷琤「我参与三峡工程論証的経過」『湖北文史資料』一九九七年S1期。しかし、入手が叶った資料では、李先念が現場の人間とやりとりした

一月六日と七日の記録は、落丁した頁があったためか、このふたつの指示が見られない。「李先念副主席、谷牧副総理視察葛洲壩工程時的重要指示（一）一九七八年一月六日午後三時三五分～五時五分」前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一六九～一七五頁。「李先念副主席、谷牧副総理聴取葛洲壩工程匯報時的重要指示（二）一九七八年一月七日午前八時五七分～一一時五二分」『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一七六～一八七頁。同右、「李先念副主席、谷牧副総理聴取葛洲壩工程匯報時的重要指示一九七八年一月七日午後三時～六時三〇分」中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』一八八～二〇一頁。この資料の二〇二頁が落丁している。

（39）崔志豪「三峡壩址選択始末」『中国科技史料』第八巻、第三期、一九八七年。または、長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』七七頁、湖北科学技術出版社、一九九七年。

（40）同右、崔志豪「三峡壩址選択始末」『中国科技史料』第八巻、第三期、一九八七年。

（41）長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』七八頁、湖北科学研究出版社、一九九七年。

（42）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三二頁。また、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第一冊、四六頁。

（43）同右、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第一冊、四六頁。

（44）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三二頁。

（45）楊世華主編『林一山治水文選』三七五～三八〇頁、新華出版社、一九九二年。

（46）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第一冊、四六～四七頁。この資料では「魏廷琤」の名前が伏せられている。または、「水電部銭部長関於長江三峡問題談話紀要（一九七八年一二月二七日）」、長江档案館蔵、档案号A〇五―〇二―〇二a―四七七。出所：前掲、武菲「三峡工程決策研究」六六頁。

（47）前掲『林一山回顧録』三〇四頁。または、林一山主編『高峡出平湖―長江三峡工程』九〇頁、中国青年出版社、一九九五年。

（48）同右、『林一山回顧録』三〇五頁。

(49) その間、李鋭は一九六七年一一月一一日から七五年五月三〇日まで約八年間にわたって政治犯を収容する秦城監獄に投獄されたが、その理由については本人にも明確な説明はなかった。「一九七九年一二月二八日、李鋭有関両次受審情況陳述、在秦城受審査的情況」李南央編『雲天孤雁待春還―李鋭一九七五～七九年家信集』三九四頁、渓流出版社（米国）、二〇〇七年。李鋭は「出獄前に、案件を担当した人間（実名あり――筆者注）に「もしこの八年間自分がどこに行ったか、なにが問題だったかと人に聞かれたら、なんと答えたらいいか」と問うたところ、激怒された。それが自分の処分にも影響した可能性がある」と回顧した。「一九七七年五月二五日、李鋭給二姉李英華信」『雲天孤雁待春還―李鋭一九七五～七九年家信集』一〇四～一〇六頁。

(50) 李鋭の一月六日日記に、「昨日大会為我平反」と一言だけある。二〇年にわたって水電部から追放された人間が復帰する前日に開かれた会議であったが、いかなる形でその復帰が説明されたかは不明である。『李鋭日記（一九六六～七九年）』第三巻、三七三頁、渓流出版社（米国）、二〇〇八年。

(51) 前掲、『中国水力発電史（一九〇四～二〇〇〇年）』第一冊（第一編）、四一九頁。

(52) 同右、『中国水力発電史（一九〇四～二〇〇〇年）』第一冊、四二八、四三四頁。

(53) 「水利電力部党組関於『李鋭反党集団』平反的決定（一九八八年一月二三日）」前掲、李南央編『雲天孤雁待春還―李鋭一九七五～七九年家信集』三九九～四〇〇頁。

この決定に、「李鋭を首謀とする右傾機会主義反党集団」の構成員として次の六名が挙げられている。すなわち、「張鉄錚、季誠龍、陳牧天、常流、李名播、徐祖徳」であるが、前四名は「主要構成員」で、後ろの二名は「一般構成員」となっている。後述するように、李鋭が七九年に北京に復帰した当日に張鉄錚と陳牧天、翌日に張鉄錚が再度季誠龍とともに来訪した。

(54) 中華人民共和国水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九～二〇〇〇年）』七、一三、二一、二五、三二頁、中国水利水電出版社、二〇〇三年。

(55) 大躍進運動後の経済困難期に、政府部門の統廃合が進められたが、周恩来は「長弁は散らばってはいけない」と五〇万元の貸付を指示した。曹応旺著『周恩来与治水』四三頁、中央文献出版社、一九九一年。

(56) 前掲、「李先念副主席、谷牧副総理聴取葛洲壩工程滙報時的重要指示（一九七八年一月七日）」一九九頁。

（57）銭正英「三峡工程的決策」（中国工程院での講演）、『水利学報』第三七巻第一二期、二〇〇六年一二月。

（58）「給水利部汪恕誠部長的一封信（二〇〇四年七月二八日）」崔軍著『田夫之子―崔軍回憶録』五〇八～五一〇頁、中国電力出版社、二〇〇五年。

潘家錚は、「李鋭が迫害をうけたのは三峡ダムに反対したからではなく、廬山会議で毛沢東に反対したからであった。しかし、彼が失脚したあとに、『反三峡』は批判されるひとつの内容になったことは確かで、また多くの人たちが『同じ党派』として連座された。だれも認めたくないことだが、こうした歴史的な怨念、集団（水利部門と水電部門間――筆者注）のわだかまりと個人の不満という要素が、のちの三峡ダムの論証に影響したに違いない」ときわめて客観的に分析した。出所：潘家錚著『春夢秋雲録―浮生散記』二八六～三八七頁、中国水利水電出版社、二〇〇〇年。または、潘家錚著『潘家錚院士文選』二五三～二五四頁、中国電力出版社、二〇〇三年。

李鵬も五〇年代における三峡ダムの論争に言及して、「当時の異なるふたつの観点をめぐる争いは、やはり仕事に対する異なる見解と異なる意見に関する論争であった」と述べ、三峡ダムをめぐる対立意見への批判が行き過ぎであったと婉曲に指摘した。同時に李鵬は、「当時三峡ダムが着工されれば必然的に限られた財源が投入されることで、ほかの水力開発プロジェクトを遂行する余力はなくなる」。また、「単純に発電の視点からすると、『先に支流、のちに主流』との（長江の開発方針）も一定の合理性があった」とし、水力発電部門の立場を擁護した。出所：李鵬著『衆志絵宏図―李鵬三峡日記』三頁、中国三峡出版社、二〇〇三年。また、『李鵬論三峡工程』五三五頁、中国三峡出版社、中央文献出版社、二〇一一年。

（59）林一山「関於長江流域規画弁公室機構問題的建議（一九七九年一月二一日）」。長江档案館蔵、档案号A〇一―A〇三―一九―二。出所：武菲「三峡工程決策研究」七四頁。

（60）同右、林一山「関於長江流域規画弁公室機構問題的建議（一九七九年一月二一日）」。

（61）「水電与河流開発之間的有関問題（一九七九年三月五日）」李鋭著『李鋭文集』第一一集「論三峡工程」二五八～二六二頁、中国社会科学出版社（深圳）、香港社会科学教育出版社、二〇〇九年。

（62）「林一山同志給王任重同志並報国務院的信（一九七九年六月二日）」前掲、「中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』四四七～四四九頁。

(63)「国務院副総理王任重同志聴取三三〇工程局党委第一書記劉書田同志滙報時的講話（一九七九年五月一四日）」同右、「中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二一五～二二〇頁。

(64)「李鋭給女児李南央及女婿信（一九七五年一二月二五日）」「李鋭給黎澍信（一九七八年一二月二七日）」、前掲、『雲天孤雁待春還―李鋭一九七五～七九年家信集』三七九～三八二頁。

(65)「附件：致中央常委諸同志的信（一九九五年一一月一六日）」、李鋭著『李鋭文集』第一〇集「論水力発電与河流規画」三二九～三三〇頁、中国社会科学出版社（深圳）、香港社会科学教育出版社、二〇〇九年。

李鋭はその後も陳雲の発言について言及しているが、内容が少々異なる。「三峡ダムに問題が出れば、党も国も滅びるぞ」との記述もある。出所：李鋭著『李鋭近作―世紀之交留言』三二八頁、中華国際出版集団有限公司出版、二〇〇三年。

または、「私は七九年に北京に戻ってきたが、陳雲が私に対して三峡ダムがまた騒がしくなったから直ちに意見を書くように指示した。一九八四年からも中央に書簡を出しているが、姚依林と宋平も私を支持しており、鄧小平も閲覧した」と述べた。出所：李鋭口述、丁東、李南央整理「我知道的三峡工程上馬経過」『炎黄春秋』二七頁、二〇一四年、第九期。

(66) 前掲、『中国水力発電史（一九〇四年～二〇〇〇年）』第一冊、四三四、四三九頁。

(67)『国務院副総理王任重同志関於三峡水利枢紐建設的信及有関批示（一九七九年四月）』。出典の明示なし。前掲、武菲「三峡工程決策研究」六七頁。

(68)「国務院領導聴取三峡水利枢紐情況匯報的有関記録（一九七九年四月二六日）」、長江档案館蔵、档案号A〇五―〇二―〇二a―六六六。前掲、武菲「三峡工程決策研究」六七～六九頁。

『李先念年譜』では、「国務院会議の主宰。長弁の長江流域三峡工程に関する報告を聴取した。三峡工程建設と三峡ダムサイト選定会議の開催などの問題について討議した」と簡単な紹介にとどまっている。また「造壩」は「選壩」の誤植である。前掲、『李先念年譜』第六巻、三六頁。

(69)「万里副総理視察三峡壩址時的講話（一九八二年一〇月八日）」、前掲、「中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件

滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』三二五～三二七頁。じつは、万里の発言以前にも、王任重は八一年一月二九日に武漢でダムサイトの問題に言及した際に、鄧小平の言葉を引用して同様の見解を示していた。王任重は魏廷琤と湖北省の幹部に対して、「（鄧）小平同志が言った。（三峡ダムの）安全保障問題は考慮しなくてよい。ミサイルを恐れたら何も建設できなくなる。ダムの爆破を恐れるなら、都市はどうするのか？　現在の北京や上海をどうするのか？　もう建設しないのか？」と発言した。「中央書記処書記王任重同志在聴取長弁副主任魏廷琤同志滙報三峡工程時的講話」一九八一年一月二九日、長江档案館蔵、档案号Ａ〇五―〇二―〇二ａ―四八四―一。出所：前掲、武菲「三峡工程決策研究」八二頁。

（70）前掲、『林一山回顧録』三〇四頁。

（71）「副総理全員が三峡ダム建設に賛成の意見を表明した」と当時魏廷琤からの電話記録にある。前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三二～三三頁、または『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第二冊、第八篇「規画」二三三頁。

（72）前掲、「国務院領導聴取三峡水利枢紐情況匯報的有関記録（一九七九年四月二六日）」、長江档案館蔵、档案号Ａ〇五―〇二―〇二ａ―六六六。前掲、武菲「三峡工程決策研究」六九頁。また、李先念と王任重が議論をリードし開催の決定にこぎつけたと魏廷琤が回顧している。魏廷琤「懐念王任重同志」『楚天主人』一九九七年第六期、総第五二期。

（73）「国務院副総理王任重同志在接見参加三峡選壩会議的全体同志時的講話」、前掲、「中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二二七～二三〇頁。

（74）王任重に北京に戻って治療するようにと李先念が七九年七月一六日に促した。前掲、『李先念年譜』第六巻、五四頁。

（75）新華社記者陳保廉、郭万里、霍柏林「対三峡水利工程能否很快上馬有不同意見以及上馬需要解決的一些重要問題（一九七九年六月一九日）」。出所：「附件：三峡工程能否很快上馬及有関的重要問題」、前掲、李鋭著『李鋭文集』第一一集「論三峡工程」二六三～二六九頁。

（76）柯礼聘の発言は自著にも収録されている。「修建三峡水庫仍需要進一歩巩固提高長江中下游防洪工程体系」『中国

水法与水管理』三二一～三二三頁、中国水利水電出版社、一九九八年。

(77) じつは、李鋭著『論三峡工程』に所収されたこの報告には、「緩建三峡的建議」を修飾する「趙紫陽同志四月二六日在国務院聴取三峡工程匯報会上提出的」が省略されているが、『国内動態清様（第一六四七期）』を引用した武菲論文にはその記載があった。前掲、武菲「三峡工程決策研究」七二頁。

(78) 「要為三峡工程興建創造条件（一九七九年六月二二日）」『建国以来李先念文稿（一九七七年一月～九二年四月）』第四冊、一九六～一九七頁、中央文献出版社、二〇一一年。または、前掲、『李先念年譜』第六巻、四六～四七頁。

(79) 同右、『李先念年譜』第六巻、二六頁。

(80) 同右、『李先念年譜』第六巻、四六頁。

(81) 前掲、『中国水力発電史（一九〇四年～二〇〇〇年）』第一冊、四三八頁。

(82) 李鋭「再談三峡問題（一九七九年七月一二日）」、前掲、李鋭著『李鋭文集』第一一集『論三峡工程』二七〇～二七六頁。または、李鋭著『論三峡工程』一一四～一二二頁、湖南科学技術出版社、一九八五年。

この意見書は陳雲の指示により作成したものと前者の著書に明示しているが、八五年出版の後者において、「陳雲」の実名が伏せられ「中央領導同志」となっている。

(83) 前掲、『李鋭日記（一九六六～七九年）』第三巻、三七三～三七七頁。一月六日から日記が途絶えた同月一九日までに訪ねてきた水電部門の人間は、「李鋭反党集団」の構成員である張鉄錚や陳牧天をはじめ、林漢雄、王宝基、季成龍、沈信祥、李代耕、陸欽侃、程学敏、顧文書、賀毅、蘇哲文、羅西北、呉賓、黄元鎮、覃修典、高希聖、奚景岳、馬承簾、陸茂竹、張昌齢、李鵬などである。また李鋭自身は、元上司の劉瀾波と李葆華を訪問し、一月一三日に陳雲とも通話した。

この本では「王宝基」も「李鋭反党集団」の構成員になっているが、前掲、「水利電力部党組関於『李鋭反党集団』平反的決定（一九八八年一月二三日）」においてその名前が見られない。

(84) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」五三頁。

(85) 前掲、『中国三峡建設年鑑（一九九四年）』一九九頁。

(86) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三二頁。

（87）李鋭「参観巴西和美国水電的簡要滙報」前掲、李鋭著『李鋭文集』第一〇集『論水力発電与河流規画』三二一～三二五頁。

（88）前掲、『李先念年譜』第六巻、六四頁。

（89）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三頁。一九七九年と八〇年における中国の外貨準備高はそれぞれ八・四億米ドルとマイナス一二・九六億米ドルであったことを考えると、水力開発に特化した二〇億ドルという借款のもつインパクトの大きさが想像できよう。出所：www.safe.gov.cn（国家外滙管理局ホームページ）、二〇二一年四月三〇日アクセス。

（90）前掲、『林一山回顧録』三〇七頁。一方、魏廷琤はこの借款をめぐる両部門の軋轢について言及を避けている。魏廷琤「美国参与三峡工程始末」前掲、『中国共産党与三峡工程』四〇九頁。

（91）「王任重給李先念的信（一九七九年一一月八日）」、「李鋭給姚依林的信（一九七九年一一月一六日）」、「李先念給余秋里、王任重、谷牧、姚依林的信（一九七九年一一月二二日）」（この書簡は「三峡工程再討論一次（一九七九年一一月二二日）」のタイトルで下記文献に所収されている。前掲、『建国以来李先念文稿』第四冊（一九七七年一月～九二年四月）、二〇八頁）、「劉瀾波給中央領導的信（一九七九年一一月二三日）」。これらの書簡および鄧小平らの「批示」は、武菲論文からの引用である。前掲、武菲「三峡工程決策研究」七六～七七頁。

しかし、武菲論文では初出の出所が明記されていない。林一山は、最初の三通について「現存档案にある」としていることからすると、武菲が資料収集した「長江档案館」に所蔵されている可能性が高い。同右、『林一山回顧録』三〇七頁。また、王任重と劉瀾波の書簡が華国鋒にも回された。崔志豪「三峡工程論証工作的由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一三頁。

（92）前掲、『李先念年譜』第六巻、九〇頁。年譜では、『建国以来李先念文稿』にある「この件で実に頭を痛めている」という文言はない。「三峡工程再討論一次（一九七九年一一月二二日）」、前掲、『建国以来李先念文稿（一九七七年一月～九二年四月）』第四冊、二〇八頁。

（93）前掲、『三峡工程技術研究概論』七八頁。

（94）前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三頁。

じつは、「三峡ダムサイト選定会議終了後に、六つの『専業組』の責任者が国務院で報告し最終的にダムサイトを決定する計画であった。しかし、王任重は李先念の指示として、国務院は報告を聴取せず、水利部が報告会を主宰し、報告にまとめて国務院で審査するということに変更することになった」との記述があるが、変更になった事由は不明である。出所：「長江三峡水利枢紐選壩会議匯報会簡報第一期（一九七九年九月七日）」長江档案館蔵、档案号A〇五―〇二―〇四―二八〇―二。出所：前掲、武菲「三峡工程決策研究」七二頁。

(95) 同右、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三頁。または、前掲、崔志豪「三峡壩址選択始末」『中国科技史料』第八巻。

(96) 「人防問題是選定三峡壩址的焦点」、前掲、柯礼聘著『中国水法与水管理』三二四頁。これは「一九八〇年九月に三峡ダムサイト選定会議での発言」となっているが、「一九七九年」の誤植であると思われる。

(97) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三頁。または、李鎮南著『治江側記』一四九頁、中国水利水電出版社、一九九七年。

(98) 前掲、「人防問題是選定三峡壩址的焦点」柯礼聘著『中国水法与水管理』三二五頁。

(99) 前掲、崔志豪「三峡壩址選択始末」『中国科技史料』第八巻。

(100) 同右、崔志豪「三峡壩址選択始末」『中国科技史料』第八巻。前掲、「水利部関於三峡壩址選択和做好前期工作的報告（一九七九年一一月一五日）」陳夕総主編『中国共産党与三峡工程』九八～一〇一頁。

(101) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三～三四頁。じつは、その前日に、林一山が国務院に対して「関於三峡水利枢紐的報告」を出しており、「三峡工程の重大な技術問題は二十数年の研究を重ね、すでに基本的に解決した。現在一部の人間によって出された異なる意見と具体的な問題点については今後の設計と研究過程で答えることができる」との見解を示した。前掲、崔志豪「三峡工程論証工作的由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一二頁。

(102) 同右、崔志豪「三峡工程論証工作的由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一二～一三頁。

(103) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』「生産技術類」第三冊、第九篇「工程設計与建設」三三頁。または、前掲、李鎮南著『治水側記』一四九頁。

(104)「李先念副主席、陳雲副委員長、谷牧副総理対葛洲壩工程質量問題的批示（一九七八年七月八日、二六日、二七日と二九日）」、前掲、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二〇九～二一〇頁。または、「李先念、陳雲同志在『経済消息』第一二期上的批示（一九七九年六月一〇日、一三日）」『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二三一頁。または、前掲、『李先念年譜（一九七〇～七八年）』第五巻、五二四～五二五頁。

(105)「関於葛洲壩工程浪費問題的情況報告（一九七九年一〇月）」同右、『中央領導同志対葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年一二月）』二三四～二三七頁。

(106) 前掲、拙稿「長江葛洲壩ダムの失敗と三峡ダム計画の再浮上―中国文化大革命期の国家建設における国務院業務組」。